



B棟内部（発電機の台座）



B棟入口前石積（爆破除け）



ハギナーラ棟入口

第2節 竹富町

1. 竹富島南海岸の銃眼

所在地：竹富町竹富
立地（標高）：海岸（約0 m～5 m）

形態：人工堆

種別：銃眼

現状：銃眼内部は埋没している箇所有り

保存状況：南海岸に放置

築造者：独立歩兵第301大隊第1中隊

竹富島住民

築造年月日：1945年（昭和20）

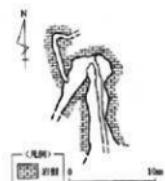
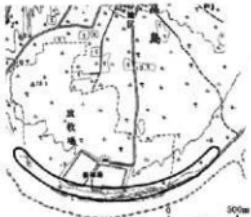
戦時中の使用状況：内部に機関銃を設置

主な構成：塹、銃眼、銃眼内部に至る通塹

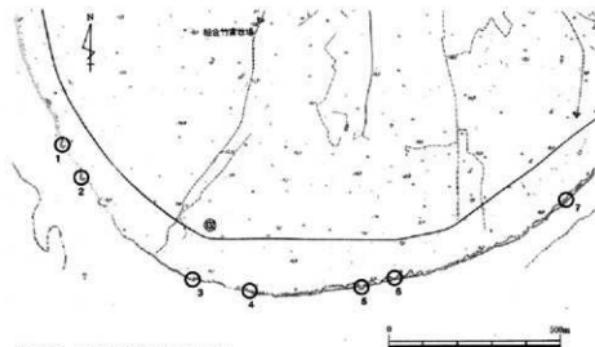
概要

竹富島の南海岸は塊状石灰岩の岩礁と砂浜が混在しており、岩礁に掘り込まれた7基の銃眼をもつ塹が約1.8kmにわたって点在していることを確認した。海岸から銃眼内部へ入ることができる場所は塹以外見当たらないことから、内陸部から石灰岩を掘り抜いてつくられているが、海水の浸透や、砂の流入で殆ど埋没している。塹①～塹③は銃眼は1ヶ所、塹④～塹⑦は銃眼を2ヶ所所有しており、銃眼の大きさは幅10cm～30cm、横20cm～30cmの長方形である。また、銃眼の周囲をセメントで補強している箇所も見られる。海岸から銃眼内部に入ることができる場所は平面形で「V」字状になっており、銃眼方向には内部の幅、高さとともに漸次狭まる。また、塹内部から内陸側への抜け穴があり、そこから石灰岩を掘り抜いてつくられた型堀が続いている。

竹富島に駐屯した部隊は独立歩兵第301大隊の第1中隊（以下・大石部隊）で1944年（昭和19）12月17日から竹富国民学校（現・竹富小中学校）に駐屯した。米軍の予想上陸地域を島の南海岸と想定し、大石部隊は本格陣地として当地域に銃眼を構築した。構築作業には兵隊だけでなく島民の男子も徴用され、石塹と爆薬を使用したという。大石部隊は島の最高標高であるシブフルの丘の地下に南北に通ずる塹を構築したが、構築作業の途中で敗戦した。現在、4ヶ所あったとされる塹口は全て埋められてしまっている。



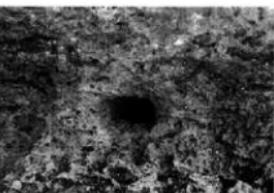
第32図 銃眼③内部平面図



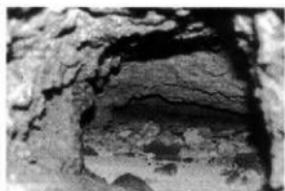
第33図 竹富島南海岸の銃眼配置図



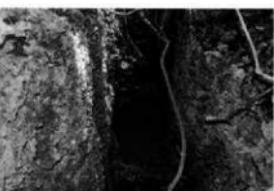
銃眼②遠景（南東から）



銃眼②



銃眼②内部



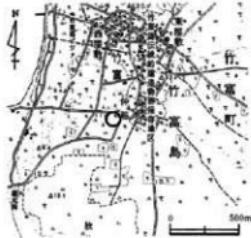
銃眼③内部に残る型堀

竹富島の避難壕

戦時中の竹富島の避難壕は聞き取り調査などで2ヶ所確認することができた。1945年（昭和20）4月頃から竹富島も空襲が激しくなり、住民は要塞の周辺にある自然壕に避難していたが、後に西表島の東部に位置する由布島や、由布島の対岸に位置する慶太城山などに疎開させられた。

2.ヤンガー

仲筋集落の西はずれに位置する自然壕で、戦時には仲筋住民が避難壕として利用していた。南東向きの開口部から内部に下りる階段がつくられており、二方向に分岐している。北方に向むる堤は塹口からの土砂が甚しく、裏は完全に埋没している。一方、北西方向へ進むと内部は広く、奥行も25m程ある。地下水が天井から染み出しているため内部の湿度是非常に高い。また、内部には石積み、石段が見られるが、これは戦後構築されたものである。



3.ティラクガマ

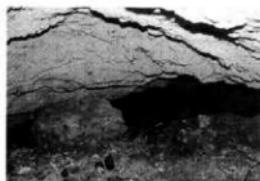
集落の周りを走る外環道路からコンドイ浜へ行く交差点の北側に位置する自然壕で、西島集落の住民が避難したといわれる。堆木に覆われた堤は西方向に開口し、付近には石積みや石垣も見られる。内部はヤンガーよりは狭く二方向に分岐している。南東方向に進むと別の塹口が見られるが、ほとんど埋没している。聞き取り調査で確認された避難壕で、今回初めて報告するものである。



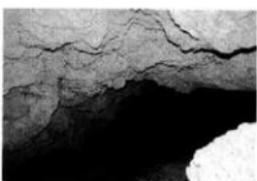
ヤンガー遠景（南から）



ヤンガー入口



ヤンガー内部



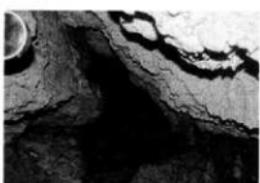
ヤンガー内部



ティラクガマ遠景（北東から）



ティラクガマ入口



ティラクガマ内部



ティラクガマ入口埋没状況

8. アールムティの特攻艇秘匿壕

所在地：竹富町小浜
 立地（標高）：海岸（約0m～5m）
 形態：人工塹
 種別：秘匿塹
 現状：内部は落盤している箇所有り
 保存状況：海岸に放置
 建造者：第26震洋隊
 建造年月日：1945年（昭和20）
 戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿塹として利用
 主な構成：塹

概要

小浜島の東部に位置するアールムティと呼ばれる海岸には、戦時中、第26震洋隊が構築した特攻艇秘匿塹が現存している。砂岩の岩壁が露頭している地盤に掘りこまれた秘匿塹は、塹口が海岸に迫っていることから、特攻艇を秘匿し、迅速に出撃するのに適した地形であることが窺える。

塹は開口部が北西向きの2本の塹を内部で連結した平面形で「H」状の構造をなしている。塹の総延長は約130mの距離を測り、奥行4m～5mの小部屋を3ヶ所有する。塹の幅は22.6m～3.5m、高さは2.0m～2.6mで方形に近い形で掘られている。開口部は壁、天井とともにほぼ原型を留めているが、内部は粗加工となり崩落して土砂が堆積し、連結部の入口は埋没しかかっている。開口部付近の壁と天井の角にあたる部分には坑木をはめ込んだ円柱の部材痕が3ヶ所確認できた。また、開口部には、秘匿塹を構築した第26震洋隊の戦没者供養の半塔堂が置かれていたが、現在は壊されたまま放置されている。

小浜島には1945年1月31日、第38震洋隊（旅弁部隊）が駐屯したが、基地の作戦配置上の問題で1ヶ月後、石垣島の宮良に移動したため、後任部隊として第26震洋隊（以下、引野部隊）が小浜島に駐屯することになった。引野部隊は当該地域であるアールムティの海岸に特攻艇の秘匿塹を構築した。構築作業には

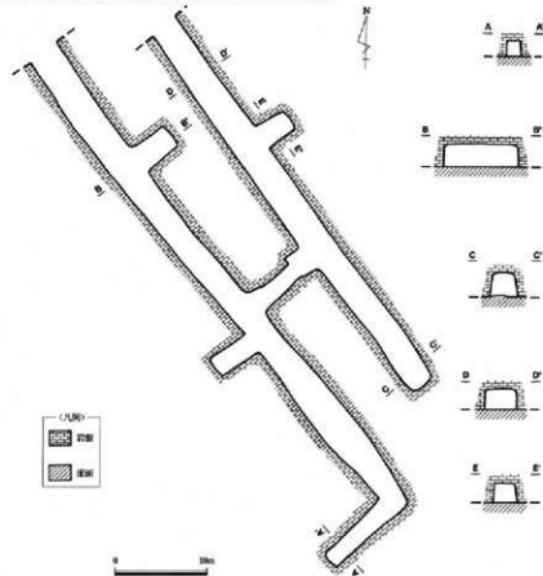


遺構（北から）



塹入口

朝鮮人軍夫をはじめ、地元住民も雇用された。境内は坑木で補強するために松木が利用された。当時、島内は松林が繁茂していたが、塹や兵舎を構築するためにほとんど伐採されてしまったという。戦後になって、塹内部の坑木は全て小浜住民が解体したことである。



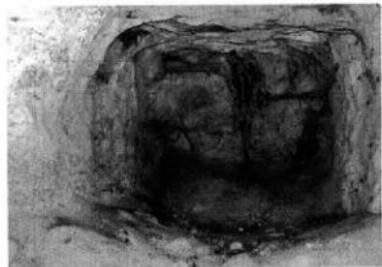
第34図 アールムティの特攻艇秘匿塹平面図・断面図



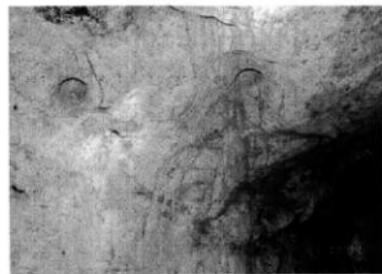
塹内部



塹内 連絡部入口



壕内部 小部屋



壕内部天井 部材痕



壕入口付近 爨塔渣散乱状況

小浜島の避難壕

小浜島で現在も残る避難壕は2ヶ所確認することができる。戦時中、小浜島では住民に対する島外への疋開命令が出されていなかったため、終戦まで島内避難することになった。空襲が始まった際は、住民は各家の中にあらかじめ隠れ込んでいた簡易な防空壕や櫛小屋などに避難し、後に空襲が激しくなると、島内にある自然壕も避難所として利用された。現在、各家につくられた防空壕は一つも残存していない。また、島の北西端に位置するアカヤ崎周辺には、ウスマップと呼ばれる自然壕があり、戦時中、住民が避難していたが現在はすでに崩落し、場所も明確ではないという。

9.インメーラーポー

島の北側にある牛の放牧場内に位置する自然壕で、かつては住民の避難壕として利用されていた。開口部一帯が陥没しているため、現在は周囲に牛が侵入しないよう牧柵が施されている。開口部は北向きで、内部は広く不定形な部屋状になっている。一部、床面を平坦に造成したと思われる箇所も見られる。内部は広い部屋状の箇所から傾斜しながら北方に向かっており、開き取りによると北側の海岸まで続いているとのことである。

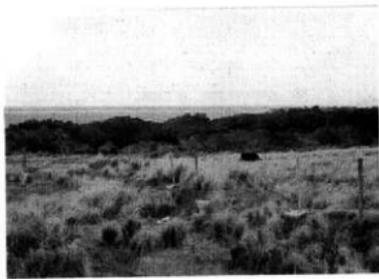


10.ニシヌハマの壕

島の北側の海岸はニシヌハマ（北の浜）と呼ばれ、琉球石灰岩の崖下に見られる海食洞をかつて住民の避難壕として利用していた。入口は狭く、内部から地下水が流れ出ている。内部は岩盤が崩落し、現在は進入することができない。開き取りによると内部には戦前の生活道具（陶器等）が散乱しているという。

ニシヌハマ一帯は最近までリゾート施設の建設計画があったが、建設途中で中止となつたため、避難壕周辺は地形の変更はなされず、当時のまま残存している。





インメアボーエ遠景（南から）



ニシスハマの場遠景（西から）



インメアボーエ入口



ニシスハマの場入口



インメアボーエ内部



ニシスハマの場内部

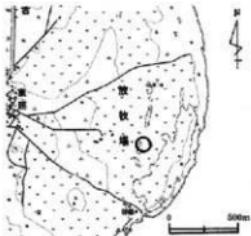
黒島の避難壕

戦時中、黒島には旧日本軍の部隊が配置されていなかった。住民は空襲に備え各家に簡易な防空壕を構築し、黒島国民学校（現・黒島小中学校）にも敷地内に9ヶ所の防空壕を掘り、「教育物語」及び重要書類などを保管したといふ。これらの防空壕の檻に自然壕も避難場所として利用された。後に、空襲が激しくなると住民は軍命により、西表島に強制隠匿させられた。

現在は住民が構築した人工の防空壕は一つも残存せず、沖縄戦時に関係する戦争遺跡としては集落周辺に2ヶ所、認めることができる。戦後、黒島は集落以外の土地を牧場として利用するため地形改変が進み、戦時中、住民が避難したいくつかの壕も埋められたと想定される。

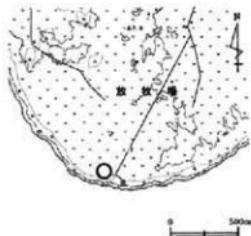
11.東筋の避難壕

黒島で最大の集落である東筋集落の南東に位置する牧場内には、かつて東筋の住民が避難した自然壕が現存する。壕周辺は平坦な牧草地で、当時の面影を残すものは見られない。開口部は長さ90cmの三角形状となり垂直に開口しているため、普段は牛が内部に落っこないように鉄板が敷かれている。内部は南東・南西・北西の三方向に広がり、遺物や加工痕が見られないことから、おそらく一時避難の壕として利用されたものと考えられる。



12.仲本の避難壕

島の最南端に位置する黒島灯台の西側には戦時中、仲本集落の住民が避難した自然壕が現在も残る。海岸近くに位置する壕は牧場の敷地からわずかに外れており、現在はアダンが寄生している。開口部は東向きで幅90cm、高さ80cmを測る。内部は狭く、大人数を収容することはできないが、床面が平坦で、加工した可能性も考えられる。内部は殆どみながら北西方向に向かって傾いていく。



東筋の避難壕遠景（南西から）



東筋の避難壕入口



東筋の避難壕内部



仲本の避難壕遺構（北から）



仲本の避難壕入口



仲本の避難壕内部

新城島の避難壕

新城島の避難壕は上地に2ヶ所、下地に1ヶ所確認することができた。1941年（昭和16）に沖縄県官白作農創設本部地開発事業部の調査に基づいて、西表島の大原に新城島（上地・下地）の住民を移住し、新集落を創設していた。当該地域の避難壕は、移住せずに島に残っていた住民が空襲の際に使用した壕である。

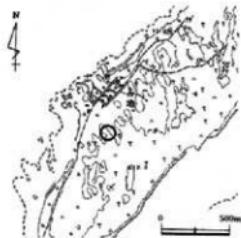
13.ニスヌガマ

上地の沼枝橋の北西側にはニスヌガマ（北のガマ）と呼ばれる被る侵食を受けた石灰岩（ノッチ状）の地形が北西-南東方向に約40mにわたって見ることができる。聞き取りによると、ニスヌガマは上地に空襲が始まるようになった際の最初の住民避難地とのことである。戦時中は、住民が避難できるように石灰岩をはつり、柱を建て茅葺で擬装していたという。現在、石灰岩をはつったという加工痕を確認することはできなかった。後に、空襲が激しくなるとニスヌガマは危険となり、上地の住民は島の中央部に位置する自然壕に避難した。



14.ゲーツヌアブ

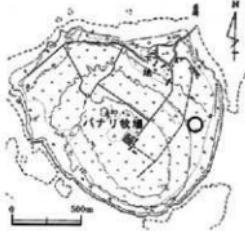
先述したように最初、ニスヌガマに避難していた住民が、空襲が激しくなり後に移動した自然壕である。ゲーツヌアブは上地集落から南東に位置する旧煙肆に立地し、現在は原野となっている。開口部は西向きで、開口部の側壁、天井は長方形に加工されている。幅1.6m、高さ0.6mを測る。内部は開口部からすぐ円形に近い部屋状になっており、東方向に続いているが埋没しており、侵入は困難である。内部は湿度が非常に高く、結露している。聞き取りによると壕は島の東海岸まで続いているといふ。



15. フツアーミアブ

戦時中、下地の住民が避難したといわれる石灰岩の自然壇である。島の東部に位置し、牧場の敷地内に現在も残る当該の壇は、周辺が平坦に造成されており、旧地形を窺い知ることはできない。壇は開口部を 2ヶ所有し、いずれも南西向きである。2ヶ所とも開口部は狭く幅 70cm~80cm、高さ 40cm~60cm 程であるが、内部で通路が広くなっている。

下地の住民が戦時中、避難した自然壇は当該の壇であるフツアーミアブとウツツアーブと呼ばれる 2ヶ所であったが、ウツツアーブは今回、確認することはできなかった。



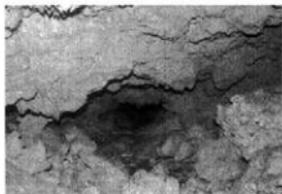
ニススガマ遠景（南西から）



ニススガマ（南東から）



ゲツスアブ入口



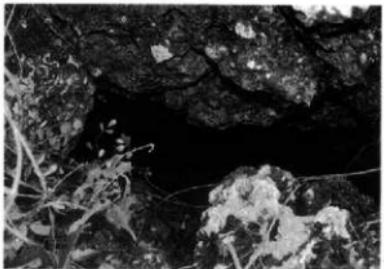
ゲツスアブ内部



フツアーミアブ遠景（南東から）



フツアーミアブ入口



フツアーミアブ内部

波照間島の避難壕

波照間島の住民は戦時中、波照間島の西表島の南東部に位置する南風見避難壕でマラリアに罹患し、多数の死者を出したことで知られている。波照間島の報復者は全住民の約3割で、全戦没者のうち、マラリア罹死者は約9割以上に達するといふものであった。

波照間島の沖縄戦時に関係する戦争遺跡は自然壕が2ヶ所、認めることができるが、住民避難壕と、先述した「マラリア地獄」のきっかけとなる波照間命令に対する協議が行われた壕について報告する。

17. 北集落の避難壕

波照間島の中央に集中する4集落の内、北集落の住民が戦時中、避難したいといわれる自然壕が現存する。壕は北集落の西に位置し、一帯はドリーネ状の地形になっている。開口部は南東向きで、開口部を塞ぐように石積みが構築されているが、いつ頃構築されたかは不明である。内部は産業廃棄物と土砂が堆積し、奥は埋没している。

聞き取りによると、当該の壕の北側には、現在鉄筋が残されているが、その地下にはかつてまさに大規模な自然壕が存在していた。当時はそこから壕の中に避難し、当該の壕まで貢通していたとのことだが、鉄塔の建設工事をする際に埋められてしまったという。



18. キッパリヤマの壕

波照間島の南東部には、キッパリヤマと呼ばれる、グスク時代に構築したとされる石墨造構が現存しているが、遺跡の東に位置する遺道沿いには自然壕があり、戦時中、軍と地元住民が波照間命令に対する協議を行った場所である。壕の開口部は北向きで、内部は南北方向に延びていて、開口部、内部ともに埋没しかかっており、進入することはできない。内部は産業廃棄物が流入している。

先述した当該の壕が波照間命令に対する協議に使用された、という記述は「沖縄県史・10 沖縄戦記録2」の155頁に記載されている。一部要約すると、戦時中、波照間島には旧日



本軍の部隊は配置されてはいなかったが、軍命により龍島残置工作員である山下虎男氏（本名・酒井清）が青年学校の教員と称して島に赴任した。1945年（昭和20）1月頃から波照間島にも空襲が行われるようになり、同年3月下旬、波照間命令が玉瀬淳厚竹富村長を通じて、学校長や集落の各班長に伝達された。その後、波照間に向けての協議が数回行われ、先述したようにキッパリヤマの壕も協議に使用された。この時協議に居合わせた山下氏は、舜聞を拒否する人に対し、投げて威嚇、舜聞を強要した。このキッパリヤマの壕での協議を最後にして、翌日から舜聞の準備が急遽に行われたといふ。

当該の壕が舜聞に向けての協議に使用された後に、住民が「マラリア地獄」といわれる程多数の死者を出したという歴史的事実を踏まえると、キッパリヤマの壕は重要な意味をもつ戦争遺跡として認識できるといえる。



北集落避難壕遺跡（西南から）



北集落の避難壕入口



北集落避難壕入口石槽（内部から）



キッパリヤマの壕遺跡（南東から）



キッパリヤマの壕入口



キッパリヤマの壕内部

鳩間島の避難壕

鳩間島は戦時中、大型爆弾や焼夷弾の投下、機銃掃射など米軍の空襲が激しかった地域である。その理由を住民は「集落の海岸線に建つカオ工場を軍事施設と間違えていたのではないか」と推測している。空襲が始まったした頃は、後退する島内の自然庵などに避難していたが、後に空襲が激しくなる中で、軍命により、西表島への強制隠れが住民に下された。西表島に隠れた住民は、食料を確保するため、空襲の無い夜間にクリ船で島に渡り、畳から芋などを畠で隠すという生活を度々繰り返していた。

19.アンヌカー

鳩間集落の東側に位置する井戸で、鳩間島には集落を立てる際、最初に発見された井戸であるとの言い伝えが残っている。戦時には集落の東側に住む住民の避難壕として利用されていた。

アンヌカーは自然洞窟の中にある下り井戸で、南向きに開口し、内部まで石段が続いている。その左側には土留めの石積みが造られているが、聞き取りによると、石積みがいつ頃造られたかは不明であるが、戦前に既に現在の状態になっていたようである。井戸の深さは約7m程で、奥の方は現在でも水が溜まっている。内部は比較的湿度が高く、外側に比べ気温が高いように感じられた。内部には貝殻などが多く散乱しており、おそらく最後のものと思われる陶器片も見られた。また、外からの流れ込みなのか、大きな石が入り込んでいた。アンヌカーは、現在でも特別な場所として島の住民が大切に管理している。



アンヌカー遠景（南東から）



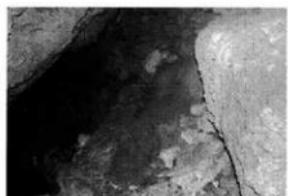
アンヌカー入口

20.パチンガカー

島の中央部に位置する原野に垂直に開口する自然庵があり、戦時は集落の西側に住む住民が避難壕として利用されていた。

開口部は三角形状で長さ約1m弱である。開口部を下りると、王前時代から造られたとの言い伝えが残る。石積みを伝て下ることができる。石積みを下ると、北方向に続く横穴が見られる。内部は非常に湿度が高いため、滑りやすくなっている。

当該の塹は聞き取り調査によって、戦時の避難壕として確認されたもので、今回、初めて報告するものである。



アンヌカー内部（最奥部）



パチンガカー遠景（南から）



パチンガカー入口



パチンガカー内部石積

西表島の避難壕

西表島は東部から西部にかけて点在する集落によって、戦時中の住民の避難状況が異なっている。東部の大瓶、古見、北部の船浦、上原は自然壕を利用し、西部の千文、粗糸、白浜、船浮には人工壕を構築している状況が見られる。とくに西部においては1941年（昭和16）から建設された船浮要塞によって軍隊が駐屯し、近隣住民に壕掘りなどの陣地構築を奉仕作業として行わせた背景があり、上記した人工の避難壕も各集落の住民が自力で構築できる状況であったと考えられる。また、加工が施しやすい砂岩に掘り込まれているのも特徴である。

21.大原のフサトゥルバー

大原集落の北西に位置する自然壕。戦時中は大原集落の住民が避難壕として利用していた。壕は開口部を2ヶ所有し、南北方向に貫通している。壕の北側は急斜面で下部には仲間川の支流が流れている。内部には長さ約5mに亘って石灰岩の石積みが見られるが、戦時に構築されたかは不明である。

大原集落は1941年（昭和16）に沖縄県自作農割課未整地圖発表事計画に基づいて、新城島（上地島・下地島）の住民を移住して形成された集落である。戦時中は区画整理された集落が米軍から軍事施設と間違えられ、攻撃目標となつたため、機銃掃射や爆弾投下が激しかった。当該壕へ避難していた人々の聞き取りによると、壕内にはおおよそ100人程避難しており、芋茎きの屋根を薪で生息していた。豆闇は空襲を避けるため壕内で過ごし、夜間に畑に行って芋などの食料を確保していたとのことであった。



大原のフサトゥルバー遠景（南から）

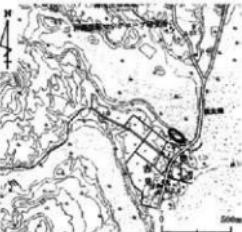


大原のフサトゥルバー入口

22.古見の避難壕

古見集落の北方を流れる後良（シイラ）川の南岸には石灰岩崖が形成され、岩陰が点在している。戦時中はその岩陰を古見集落の北側に住む人々が避難場所として利用していた。避難壕となった岩陰は3ヶ所確認された。2ヶ所は北向きに開口し、いずれも奥行きは浅い。壕の北側は後良（シイラ）川まで下る急斜面になっている。もう1ヶ所は南向きに開口し、畑に隣接している。聞き取りによると壕周辺は、戦時中荒廃地であったことである。

また、集落の西側にも自然壕があり、集落の南側に住む人々が戦時中、避難していたが、現在は畠地に圃場監視され、埋められてしまったという。



大原のフサトゥルバー内部



大原のフサトゥルバー内部石積



古見の避難壕遠景（東から）



古見の避難壕岩陰内部

23.船浦の避難壕・ヒナイ崎の壕

船浦地域には戦時に避難壕として利用された自然壕が2ヶ所現存する。共に船岡島の住民が使用した壕である。

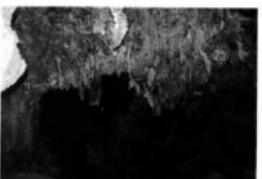
船浦集落の西、現在、宿泊施設へ至る道路の地下には石灰岩の自然壕が見られる。南北方向に貫通し、高さは目測であるが約6m近くある。内部には小川が流れ、現在は南側開口部に廃棄物が堆積している。

船浦集落の北方、通称：ヒナイ崎と呼ばれる海岸には、戦時中、船岡島の住民が避難した自然壕が現存する。砂岩が侵食されてできた自然壕で、北向きに開口する。開口部は流土が甚しく、内部は廃棄物が堆積している。内部は高さ1.2m、奥行き10mを測り、何ヶ所か崩落しているところが見られる。

船浦・上原地域を含む西表島北部は、戦前から船岡島の住民が通耕農業を行っており、稲作や畑作など農地として利用してきた。戦時中も、船浦で農作業をしていた住民は、空襲を避けるために当該壕へ避難していたという。



船浦の避難壕遠景（南東から）



船浦の避難壕内部



船浦の避難壕 壕口左側倒石



ヒナイ崎の壕遠景（西から）



ヒナイ崎の壕入口



ヒナイ崎の壕内部



上原の避難壕遠景（東から）



上原の避難壕内部

24.上原の避難壕

上原集落の北西、現在は牧場の敷地内に戦時中、上原の住民が避難した自然壕が現在も残る。石灰岩で形成された自然壕で南北に開口する。内部は下方へ傾斜しながら進むが足場は極めて悪い。開き取りによると、戦時には開口部前で炊事を行い、開口部付近の内部で藪巣や板を貯めて生活していたとのことだが、現在はその痕跡は見られない。

上原集落は近世期に古美村番所が組納から上原に移転したことにより、上原村を立村したがマラリアなどで大正末期に廢村に追い込まれた。戦時中の上原は、炭鉱の労夫の家族や、通耕農業を止め、定住した船岡島の住民などが小規模な集落を形成していた。



25. 千立集落入口の壕

所在地：竹高町西表
 立標（標高）：丘陵（約10m）
 形態：人工堆
 種別：住民避難
 現状：開口部が一部埋没
 保存状況：集落入口塹に放置
 施設者：千立住民
 建造年月日：1944年（昭和19）頃
 戦時の使用状況：千立住民の避難壕として利用
 主な構成：塹

概要

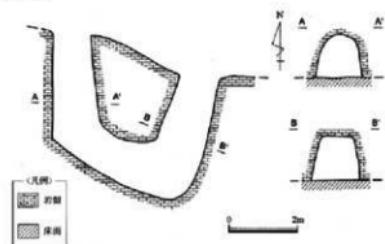
県道215号線を浦内から千立方面へ進むと、千立集落に入る直前に標高102mの金座山が右手に見えてくる。その金座山の麓に位置する用水路沿いには戦時中、千立集落の住民が第1避難所として利用した避難壕があり、現存する。

壕は砂岩に掘り込まれており、南向きの開口部が2ヶ所、内部で「コ」の字状に連結している。開口部は1ヶ所土砂で半分ほど埋没し、内部にまで流入している。内部は幅1.1m～1.4m、高さ1.2m～1.4mを測り、天井は一部崩落している箇所が見られるものの、場所によって、アーチ状や台形状に形成されている。壁や天井にはノミやつるはしによる損傷痕が多く残り、数の鉄骨に対応した部材痕が3ヶ所ずつ見られる。

戦時中、空襲の激しかった西陽の集落に比べて、千立には空襲による直接の被害はなかったといわれる。しかし、軍命により住民は当該の塹から千立集落の東側に位置する祖納岳東方の山中に避難させられた。



遺壠（南西から）



第36図 千立集落入口の塹平面図・断面図



塹入口



塹内部 部材痕



入口埋没状況（内部から）

27. 金田家の塙

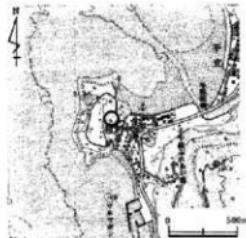
所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工塙
種別：住民避難塙
現状：残存状況は良好
保有状況：栗野家が管理
築造年月：昭和16年（1941年）
戦時中の使用状況：祖納5班の避難塙として利用

概要

祖納集落の西側は半島状の丘陵地形を形成し、麓には砂岩の岩盤が露頭している地域が見られる。戦時中は、祖納5班の住民が砂岩を掘り込み避難塙として利用していた。祖納に在住する栗野ユリ氏宅の敷地内には砂岩の岩盤が露頭しており、掘り込まれた避難塙が現存する。

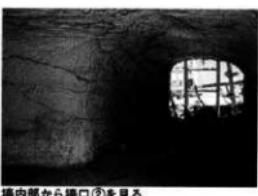
4ヶ所の開口部は全て東向きで、内部で連結した複雑な構造をなしている。開口部の幅は0.9m～1.3m、高さ0.7m～1.1mで、天井の形状がアーチ状やかまぼこ状、半アーチ状など様々であり、内部においても場所により形状の違いが見られる。内部は砂岩に掘り込まれていたため、壁や天井の壊れた所に工具の鋸削痕が見られ、丁寧に構築されているのが窺われる。また、内部には小部類が1ヶ所、階段が2段、部材搬や荷り取り等も見られ、側壁には「昭和廿年五月」と当時のものと思われる落書きが現在も見ることができる。一部冠水している部分も見られるが、内部の現状はほぼ保たれている。

金田家の塙を所有する栗野ユリ氏への聞き取りによると、塙は1941年（昭和16）から空襲に備えて構築されたという。祖納集落では戦時中、1～5班に分かれており、当該の塙は5班の避難塙として利用された。空襲の際に10～20名が塙に避難しており、塙に入りきらない時には、金田家の宿間に構築されて

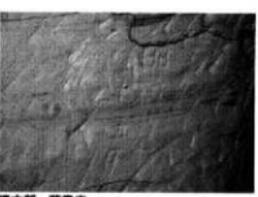


いた森山家の塙も利用したという。

森山家の塙は金田家の塙と同様、祖納班の避難塙であるが、妙君の母屋に2ヶ所の開口部が確認できる程度で、内部は完全に埋没している。聞き取りによると、森山家の塙は2ヶ所の開口部が内部で「コ」字状に連結し、段を有していたという。また、戦時中の状況では祖納集落への空襲が激しくなってきた頃に、住民が森山家の塙へ避難する途中、機銃掃射により塙前で命を落としたといわれている。



第36図 金田家の塙平面図



28. 松山家の塙

所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工塙
種別：住民避難
現状：残存状況は良好
備付状況：松山家が管理
製造者：祖納住民
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戰時中の使用状況：祖納5班の避難塙として利用

主な構成：塙

概要

金田家の塙から約50m南に位置する松山家の敷地内には、戦時中、祖納5班の住民が避難した塙が現在も残る。

金田家の塙と同様、露頭している砂岩の岩盤に掘り込まれている。塙は3ヶ所で開口部は塙①が東向き、塙②が西向き、塙③が北向きである。開口部の形状は塙①がかまぼこ状で幅1.1m、高さ1.3m、塙②は半アーチ状で幅0.9m、高さ1.1mを測り、2ヶ所とも開口部は縦取りの加工跡が見られる。なお、塙③は2001年（平成13）10月の台風により当該の塙が一部崩落したという情報を得た後に、調査したところ新たに確認された塙で、開口部がほとんど埋没しかかっていた。塙①、塙②の内部は現在、松山家の倉庫として利用されており、内部に進入することはできない。塙①と塙②の間に3ヶ所小さな横穴が掘られ、そのうち1ヶ所は塙①の内部まで貫通しており、内部からの覗き孔として使用されたと思われる。

開き取りにより、松山家の塙の南にも砂岩を掘り込んでいる塙を2ヶ所確認した。松山家の敷地内ではなく、塙一帯は雜木に覆われた状態である。2ヶ所の塙は開口部が東向きで、そのうち1ヶ所は開口部からほとんど埋没しかかっている。もう1ヶ所は奥行5m程度崩落している。いずれも戦時中は、祖納5班の住民が避難塙として利用していたという。



塙②近景（西から）



塙①入口



塙①内部



塙①、②開 横穴



祖納五班塙入口

29.白浜の避難壕

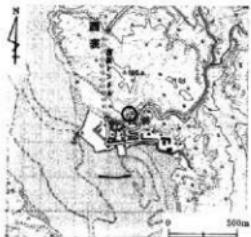
所在地：竹富町西表
立地（標高）：丘陵（約15m）
形態：人工壕
種類：住民避難
現状：埋没した箇所あり
保存状況：果樹園内に放置
製造者：白浜住民、戸越次夫
製造年月：1944年（昭和19）頃
戰時中の使用状況：白浜住民の避難地として利用
主な構造：壕

概要

白浜集落の北側に位置する果樹園の敷地内には、戦時中、白浜集落の住民が利用した避難壕が3ヶ所現存する。

壕は谷部の南京側斜面に掘削する砂岩に掘り込まれており、3ヶ所とも南東方向に開口している。内部は現在、廃棄物の捨て場となっており侵入が困難で、廃棄物で殆ど埋没しかかっている場も見られる。開口部の幅は1.5m、高さ1mで奥行は長いもので約15mを測る。平面形で一直線に掘られ、天井はかまぼこ状に構築されている。落葉は殆ど見られない、内部は壁・天井を廻る部分材質があり、雑草の小部屋を有する壕も見られる。

白浜集落は1913年（大正2）に炭鉱により形成された聚落で、炭鉱が隆盛を極めていた時期には、住民は殆ど炭鉱関係で生計を立てていた。1941年（昭和16）に船浮要塞が設置されると、白浜もその一部に組み込まれた。集落内には電話海底綫、製水所の他に憲兵隊分駐所も設けられた。1944年（昭和19）末頃から白浜地域を含む西表島西部は米軍機による空襲が始まり、白浜住民と炭鉱の坑夫は当該の壕を構築し、避難していたが、1945年（昭和20）3月頃には革命により、集落の南東を流れる仲良川流域周辺に埋没させられた。



壕①入口



壕①内部



壕①内部



壕②入口



壕③入口埋没状況

30.船浮の避難壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工塹
種別：住民避難
現状：開口部が一部崩落
保存状況：集落脇に放置
築造者：不明
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：船浮住民の避難壕として利用
主な遺構：塹



概要

船浮集落の西、集落から裏手にあるイダの浜に通じる道沿いに、戦時中、船浮住民が利用した避難壕が現存する。集落の民家からやや坂を登った場所に位置している。

壕は露頭した砂岩に掘り込まれ、北東方向に開口するが、現在は側口部が落盤が著しく、内部に進入するの困難である。内部のつくりは概ね粗加工で、開口部に比べ落盤はとくに見られない。現在は廃棄物が散乱、堆積している。規模はそれほど大きくななく幅約3m、高さ1.5m、奥行きは5.2mとそれぞれ測る。

調査に御協力して頂いた船浮西表船の船長である池田豊吉氏によると、戦時中、後述する船浮の軍事施設が配置されると、軍は住民を大原や相浦、千堂に強制隠避させていた。池田氏の実父である池田豊氏は野菜作りなどで軍に食料を提供していたため、船浮に残り、当時6歳であった豊吉氏と共に当該の壕へ潜籠することがあったとのことである。



遠景（東から）



入口落盤状況

31.船浮の戦争遺跡群

所在地：竹富町西表
立地（標高）：海岸、丘陵（約0m～15m）
形態：人工塹、構築物
種別：陣地
現状：残存状況は良好
保存状況：集落南側に放置
築造者：石垣島海軍警備隊
築造年月日：1941年（昭和16）頃
戦時中の使用状況：海軍警備隊の陣地として利用

主な遺構：塹、木源用地跡、接続路



概要

船浮集落の南方に位置する地域一帯は戦時中、石垣島海軍警備隊が構築したといわれる特攻艇の掩蔽壕や発電機塹、海軍棧橋跡などの多種多彩な軍事施設跡が現在も見ることができる。

集落の南側には海岸までせり出した独立丘があり、砂岩を掘り込んだ大規模な壕が見られる。壕は独立丘を2本貫通させている。塹①は北東～南西方向に一直線状に、塹②は内部で2ヶ所所断面しながら海岸に開口し、塹③、塹④を内部で連絡する支道を2本有している。塹①は幅2.9m～3.9m、高さ2.2m～2.8mで、長さは80mを測る。落盤は殆ど見られず、壁と天井の角には円筒形の坑木痕が數ヶ所見られる。塹②は幅1.5m～2.3m、高さ1.5m～1.9mで長さは80mを測る。塹②の2ヶ所の開口部には戦時中、IS機関砲が設置されていた。落盤は見られないものの、粒子の細かい砂が床面に堆積している。2本の支道は落盤のため出入口が封鎖されており、進入するところはできなかった。通道内は現在、コウモリの巣息地となっている。塹③の南西側開口部から南西に17m進むと、特攻艇を格納したといわれる壕が見られる。南向きに開口する壕は一直線状で長さは21m。岩壁を掘り込んだ後に開口部から内部、5mに亘って壁、天井をコンクリートで固められた。コンクリートの部分は天井がアーチ状で幅2.7m、高さ2.2m、内部の素掘りの部分は幅約4m、高さ約3mをそれぞれ測る。素掘りの内部は概ね粗加工だが、円筒形の坑木痕が2ヶ所見られる。床面には粗粒な一部が一部残存している。

特攻艇の格納壕から南西に約34mの位置には、コンクリートで構築された発電機塹が見られる。南向きに開口し幅4m、高さ3.6m、奥行き10mを測る。内部の中央には発電機を設置したと思われる長1.6m×L2mの白柱が見られ、鋼筋が2列各5本の計10本が露頭した状態である。また天井の隅には幅15cmの側溝が掘っている。塹の開口部から南東には、砂岩の石積みが南北方向に約7mに亘って残存している。

発電機塹の南西約51mの位置には、コンクリートで構築された弾薬庫塹が見られる。南向きに開口し幅2.6m、高さ1.8m、奥行き26mを測る。内部は壁に鉄筋や鉄製品が埋め込まれ、アーチ状の天井には日暦が3ヶ所露頭している。また最奥部の天井には通気孔が見られる。現在はコウモリの巣息地となっている。

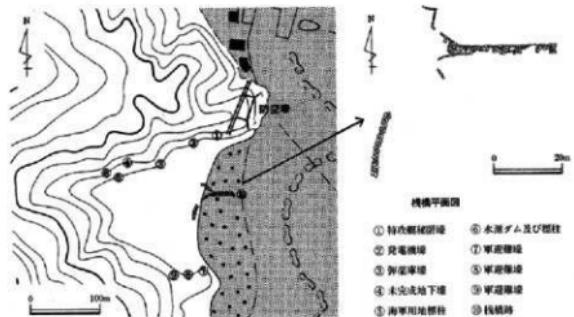
弾薬庫塹の西側約50mの位置には砂岩を掘り込んだ壕が見られる。開口部に土砂が堆積し、また開口部の南約15mの位置には、塹を掘り込んだ際に削られた砂岩の石積みが見られる。開き取りによると、当該の壕は未完成で、用途は不明とのことである。

本完成の壕の西には小川が流れしており、戦時中、軍が水源地として構築したダムが現在も残る。ダムの周辺には「海軍用地」と刻まれた石製の柱が2ヶ所見られ、小川内の石に先述した標柱を嵌め込む柱底が1ヶ所確認できた。

特攻艇の格納壕から南に約80mの海岸には海軍棧橋跡が見られる。棧橋の礎石となる切石の石積みが

幅2.1m、干潮時には長さ約27mに亘って東方向に延びている。栈橋跡の周辺にも平面形で一直線状やL字状の石積みが見られる。聞き取りによると、栈橋跡に残る石積みの石材は内離島から運搬されてきたとのことである。また、栈橋跡から約100m南に位置する海岸には、砂岩に掘り込まれた奥行2m~3.5mの小さな塹壕が3ヶ所見られる。

聞き取りによると、当該の軍事施設は、既に配備されていた船浮要塞の主力部隊が石垣島に移動した後、引き続き西面に残留した一部の部隊が施設を構築したことである。構築作業は戦艦の坑夫や朝鮮人が徴用された。船浮に駐屯した軍は施設を含めた当該地域を軍事基地化するために、住民を東部の大原や植田、千立に強制隠匿させている。



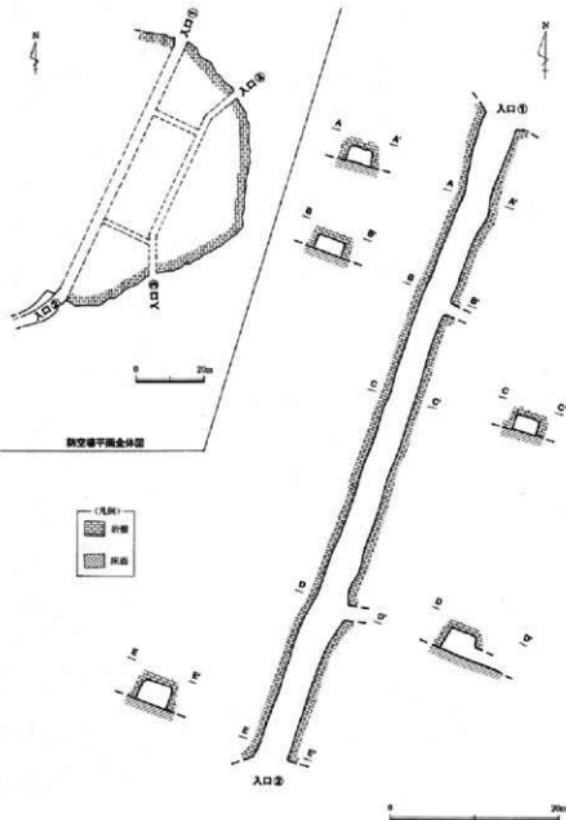
第37図 船浮の戦争遺跡群配置図



船浮の戦争遺跡群遠景(東から)



防空壕入口①



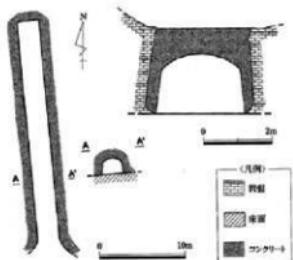
第38図 防空壕の平面図・断面図



第39図 発電機場



第40図 特攻艇密匿壕



第41図 弾薬庫



防空壕内部



防空壕入口④



①特攻艇密匿壕入口



②特攻艇密匿壕内部



③発電機場入口



発電機場内部 台座跡



④弾薬庫入口



⑤弾薬庫内部奥壁



④未完成地下壕入口



⑤海軍用地標柱



⑥水源ダム



⑦軍避難壕入口



⑧軍避難壕入口



⑨残機跡全景 (南から)



⑩枝機跡石碑



調査状況

32. 南風見田の忘勿石

所在地：竹富町南風見

立地（標高）：海岸（約0～5m）

形態：碑銘

種別：記念碑

現状：記念碑が構造して建てられている

保存状況：文字が擦り込まれた砂岩の風化が進行

製造者：諫名信升氏

製造年月日：1945年（昭和20）

戦中の使用状況：波照間住民の隠避地

主な遭難：砂岩に擦り込まれた文字



忘勿石の碑

西表島の東南部に位置する南風見田の海岸には戦時中、波照間国民学校の校長であった諫名信升氏が岩盤に文字を刻んだ忘勿石が現在も残る。

南風見田の海岸を含む南風見地域は、波照間島の住民が軍事により1945年（昭和20）4月から強制隠避させられた地域である。多数の住民が当該地域でマラリアに罹患し、死者が続出していく中で、諫名氏は隠避解除を独立海軍第45旅團の宮崎旅團長に直訴した。隠避の窮状訴えは認められ、住民の帰島は同年8月までに終了した。諫名氏は隠避生活を終える前にマラリアで亡くなった児童を悼み、海岸に隠避する砂岩の一角に「忘勿石 ハデルマキナ」の文字を彫ったといわれる。

忘勿石は岩盤の風化が進行しているため、1992年（平成4）8月に「忘勿石之塔建立事業開成会」（平田一雄会長）によって「忘勿石之碑」が建立された。碑は忘勿石の西側に建てられ、諫名氏の胸像とマラリアで犠牲となつた80名の児童の刻銘、碑文と「忘勿石の歌」の四題が刻まれている。



忘勿石

船浮要塞戦争遺跡群

1) 沈没要因の概要

1941年(昭和16)に臨時要塞として建設された船浮要塞は、天然の良港である船浮港を囲むようにして北から祖納半島、外羅島、内羅島、サハ崎の4管区に設置された軍事施設である。要塞の中核となる司令部は、第1区の内羅島に設置された。司令官は下永次郎(陸軍大佐)、その他重砲連隊(隊長・山吉豊吉少佐)本部、高射砲隊、歩兵隊、陸軍病院も同島に配備された。第2区は祖納で、第2中隊(隊長・北村亮左中尉)が配備、第3区は外羅島で第1中隊(隊長・小野耕一中尉)が、第4区はサハ崎でサハ崎守備隊がそれぞれ配備された。要塞の任務は南方から石油などの資源を運ぶ艦船の待避・停泊などを守護することであった。

要塞は初期の策定による建設作業は約3ヶ月で終了したものの施設は完成せず、先述した各部隊が自活動しながら陣地構築を継続し、また地上の児童、先生教官等を動員して約3年かけて構築された要塞施設であった。しかし、その施設は高射砲には地上に露出し、防禦庫や兵舎なども空と露呈するまであり、航空機が主力となった太平洋戦争においてはやはり時代遅れの施設であった。1944年（昭和19）4月1日には、沖縄全島の守備軍第32軍の指揮下に入り、同年5月8日船浮要塞司令部は解消された。また同年9月には船浮要塞重爆連隊を改称した重爆第8連隊は小野隊を廃し、主力部隊を石垣島に移駐するなど、要塞としての戦略的地位は次第に失われていくこととなった。

2) 故後の状況

終戦後、要塞内に配備されていた兵庫が復員したため、要塞地域に建設された施設群は使用されることもなくそのまま放置された。内堀周、外堀周は戦後の30年間に亘って放牧地として利用され、相模住民の根拠地もつぶらされているが、現在は外堀周は資本家賃貸として利用されているものの、両周とも無人島である。サト崎は灯台が建設された以外は何も変容されていない。相模に開いては周辺に個地があるが、施設跡は現在竹林となっている。つまり、先述した地城はいずれも地形変容等が全く行われなかつたため、戦中で使用したこれらの施設跡が現在にまで残る、疎離することなく残っている。

3.1 開音方法・結果

今回の船底塗装の調査は既に实地で実測されている資料、聞き取り調査等を基に2回に分けて行った。調査には鶴見文化財監修掛合員である石垣金氏、竹富町史編纂室係長の通事官作氏、現・沖縄県平和祈念所資料収集会主で1986年(昭和61年)に竹富町立白浜小学校に教員として赴任し、当時「西表島の戦争」を調査して研究していく城原良氏も同席して頂いた。調査の結果、4管区で15所の道路を確認することができた。各地区的分布図は図のとおりである。

今回の調査で特に外離島、内離島、サバ崎は船でしか到達することができない地域で、且つ自然環境が戦時中と比較しても変化していることから、路線は困難なものであったが、その中で15ヶ所の道場が確認できたのは大きな成果であったといえる。しかし、時間的な制約もあり、全てを把握することはできなかったため、未だ確認できない戦時道場が存在する可能性が高いことを補足しておく。

なお今回の本報告では戦時中、船浮要塞で区分されていた4管区の名称を踏襲し、第1区（内離島）から第4区（サハ島）までの間に、各地域ごとで確認した戦争道筋を詳細に報告することとする。



第42圖 帶彈頭高壓噴頭

内離島(第1区)

内離島で確認された被弾跡は①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、③船浮要塞司令部跡、④慰安所跡の4ヶ所である。島の北側に位置する成田の海岸にはついで安東丸事件(戦時中、船浮港沖に漂流した安東丸の中国人・朝鮮人乗組員を旧日本軍が強制労働で労使し、後に西表島の南西に位置する鹿川の海岸に乗組員を置き去りにした事件)で知られる安東丸の船底部の残骸や遺物が最近まで残存していたとのことだが、台風(時期不明)により海に流されてしまったため、今回の調査では確認できなかった。

① 内離島砲台跡

島の北側に位置する独立丘の頂部に1基残存する。砲台跡はコンクリート製の枠が厚さ20cm、高さ120cmで平面形が「C」字形に立ち上げられている。両側約3mに亘って枠がない部分はおそらく専門に相当し、その方向は船浮湾に向けられている。内枠は直径約6mで、内枠には弾薬を保管する貯蔵穴が3ヶ所見られる。貯蔵穴は幅1m、高さ80cm、奥行1mで3ヶ所とも同規格である。床面にはコンクリートは貼られておらず、直径約5cm~10cm程度の砂岩をパラス状に散き詰めている。

記録による戦時中、内離島には新設式12cm連射カノン砲を2門装備していたとのことだが、今回の調査では当該の1基しか確認できなかった。また、調査に同行していただいた城間良昭氏によると、約20年前城間氏が当該の砲台跡を調査した際には、砲台跡がある独立丘一帯は雜木が繁茂した現在とは景観が異なり、スキに覆われており、砲台跡まで容易に到達できたとのことです。

② 陸軍病院跡

島の北側には丘陵地形の小平島があり、その小平島の突端部付近には戦時中、陸軍病院が建てられていた。周辺地形は西側を除き急傾斜もしくは急斜面であるが、病院跡一帯はある程度面積を有した平場が確認できる。平場には建物の基礎枠と思われるブロック片が散乱し、残存する基礎枠も一部しか見られないため当時の規模などを把握することはできなかった。ブロックの材質は砂岩を中心にして珊瑚にサンゴ石を含んだコンクリートで形成されている。

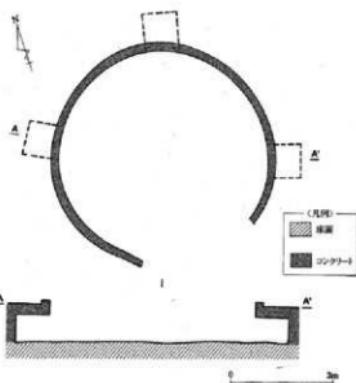
陸軍病院は1941年(昭和16)10月5日、大阪陸軍病院において編成され、同月13日内離島に上陸した。病院は配備されるとき要塞司令部の指揮下に入り、内離島を拠点に進撃病院室を招納に置き、陸軍軍医は各隊を巡回した。陸軍病院は重砲兵第8連隊と同様に1944年(昭和19)9月、独立混成第45旅団の命令により、一部は西に残し、主力は石垣島に移動。石垣島では石垣国民学校(現・石垣小学校)に病院を開設し、診療活動に入ったが、後に空襲が激しくなると、勢度登岳の山中に移り診療を行ったという。

③ 船浮要塞司令部跡

島の北側に位置する旧成田村地域には戦時中、船浮要塞司令部が配備されていた。今回の調査で旧成田村地域を踏査したところ、建物跡の痕跡は確認できなかったが、南側にある独立丘(通称・成坂山)の頂上付近には擬砲跡が3ヶ所確認できた。擬砲跡はいずれも地面を掘り込み、3ヶ所のうち1ヶ所は円形、残り2ヶ所はドーナツ状となっている。擬砲跡の規模は直徑約3m~3.5m、深さ約0.8m~1.2mである。そして擬砲の丸から南側に掘り込みが一直線状に伸びているのが3ヶ所に共通している特徴である。

④ 慰安所跡

旧成田村地域には戦時中、要塞司令部の他に慰安所も設置されていた。慰安所跡は先述した擬砲跡がある独立丘から北西側の海岸に近い平地に見られる。雜木等が繁茂した慰安所跡は建物の基礎枠は残存せず、コンクリートとレンガ片が散乱しているが、五右衛門型と思われるレンガ製の遺構が現在でも残る。また慰安所跡の周辺には戦時にコンクリートに構築し直したと思われる井戸跡も見ることができる。



第43図 内離島砲台跡



内離島連隊 (西南から)



内離島砲台跡 内壁 (貯蔵穴)



内離島砲台跡 砲門



内離島砲台跡 内部床面 (砂利敷)



①内陸島砲台跡 調査状況



②陸軍病院跡 基礎枠散乱状況



③陸軍病院跡周辺 コンクリート残存状況



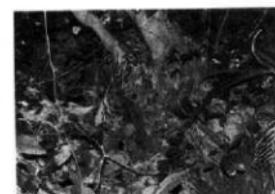
④要塞司令部跡周辺 観砲跡 (ドーナツ状)



⑤要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)



⑥要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)



⑦要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)



⑧要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)

⑨要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)

⑩要塞司令部跡周辺 観砲跡 (円形)

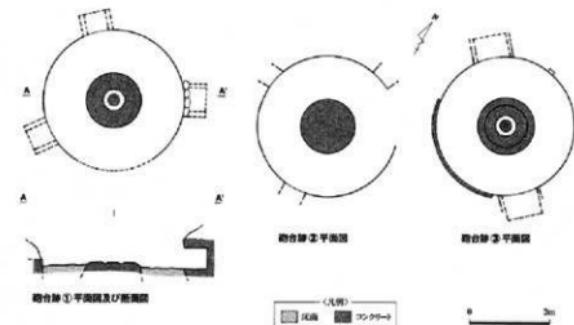
祖納半島（第2区）

祖納半島の西端部に位置する丘陵には祖納砲台跡が基礎確認されている。上村と呼ばれる同地域は戦前、畑作地として利用されていたが、要塞建設に際して旧陸軍ちは私有地を強制的に接収。建設用地には監視兵を配置し、住民の立ち入りを禁止した。

⑤ 祖納砲台跡

祖納砲台跡は現在、周辺の畑作地から外れた竹及びアダン等が生息した原野になっている。主基の砲台跡南北に並び、いずれもコンクリートで円形の外枠を造り、外枠の直徑が5.2mと共通している。砲台跡①は弾薬を保管する貯蔵穴を3ヶ所している。貯蔵穴は幅、高さは80cm、奥行は90cmで、3ヶ所とも同規格である。外枠の内面には円形で直徑2mのコンクリート製の砲座跡が見られる。砲座の中心には重砲を設置できるように直徑15cmの穴が開けられている。また、外枠の上に土留のために砂岩の石積みを構築している。砲台跡②は①と同様、貯蔵穴を2ヶ所有し、内部の砲座も土砂が堆積しているものの、構造は①と同様である。①と異なる点は外枠の下に排水溝が見られる事である。砲台跡③、④は貯蔵穴が2ヶ所で、対角線上に位置している。貯蔵穴の規格は幅120cm、高さ85cm、奥行95cmで全て共通している。内部の砲座は規模、構造とも①と同様であるが、③の砲座はコンクリートの下に砂岩を円形に加工して、①よりも砲座の部分が盛り上がっている。また、②と同様に外枠の下に排水溝が走っている。④に関してはアダンの生息が特に著しく、内部は土砂が堆積して貯蔵穴が半分ほど埋没している部分も見られる。

戦時中、祖納には重砲連隊の第2中隊(隊長・北村吉角中尉)が配備され、38式野砲4門が設置されていた。当該の4ヶ所の砲台跡はそれに相当する。1942年(昭和17)10月、重砲連隊は第2区(祖納半島)と第4区(サハ崎)の全部隊を外離島に集中させたため、以降、祖納に設置された砲台は使用されたかは不明である。砲台①のすぐ東側には、砂岩をブロック状に加工し、コンクリートを累いで積み上げた建物跡(用途不明)や、側壁を砂岩ブロックで構築した堆積と思われる掘り込みを見ることができる。



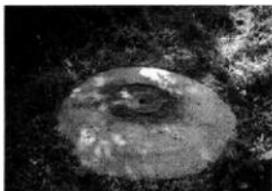
第44図 祖納砲台跡



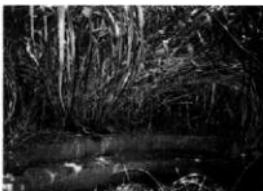
相納砲台跡景（南から）



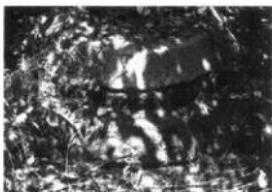
砲台跡① 砲座と貯蔵穴



砲台跡② 砲座



砲台跡③ 円形倉



砲台跡④ 貯蔵穴下の砂岩加工状況



砲台跡⑤ 貯蔵穴底面状況



砲台跡周辺 建物跡



砲台跡周辺 葦塀

外離島（第3区）

今回の調査で4管区の中でもっとも多い7ヶ所の戦争道路を確認できた。特に島の南部に位置するV字谷地形一部には非小隊兵舍跡はじめ、5ヶ所の戦争道路が点在している。4管区の中で最も外洋に近い外離島は4管区の戦争道路の中より実戦向きの陣地を構築していること、先述した重砲兵隊隊の全部隊を外離島に集結させたことなどから、要塞地域の最前線として戦略的に重要視していたことを窺うことができる。そして、未確認の戦争遺跡が残存している可能性は4管区の中でもっと高いと思われる。

⑥ 戦争道路

島の北東部に位置する独立丘（通称・ボウシ山）の中腹に戰時中、旧日本軍の避難場として利用された自然壕が現在も残る。壁は砂岩が侵食されてきた大規模なガマで、南西に開口する。幅は約25m、高さは約3m弱、奥行き約3mをそれぞれ測る。ガマの内部は砂が堆積しており、加工痕は特に見られなかった。ガマの入口前に車が停車したと思われる土留の石積みが見られる。車が遮断した様ということことで、周辺に軍の施設跡が残存しているのか、独立丘の頂部などを調査したが、確認することはできなかった。

⑦ 外離島砲台跡

島の北部にある山間部に位置し、2基確認されている。砲台跡の北側は海岸からすぐ2段階に発達した急崖地形が続いている。砲台跡①は相納砲台跡と同様コンクリートで円形の外枠を造り、外枠の直径は約2.5mと共通している。異なる点は2ヶ所の貯蔵穴が外枠から外れた位置に造られていることである。貯蔵穴は対角線上に位置し、幅80cm、高さ75cm、奥行き85cmで2ヶ所とも同規格である。内部の砲座は直径2.8mと相納砲台跡よりも規模が大きく、砲座の外枠がはっきり確認できる。砲台跡②から南西約50mの位置に砲台跡②が残存する。砲台跡の外枠は規格、構造とも①と同様であるが、外側に設置されている2ヶ所の貯蔵穴の周囲にも砂岩ブロックにコンクリートを流した石積みを施し、平面形で「C」字状に構築している。貯蔵穴の規格は砲台跡①と同様であるが、対角線上に配置していない。また、貯蔵穴を囲む石積みから北向きに塗壁が走っている。

戦時中、外離島には斯加式12cm連射カノン砲を2門設置しており、当該の砲台跡はそれに相当する。砲台跡①の北東斜面約30mの位置には、砂岩ブロックをコンクリートで繋いだ石積みで通路を構築している。西向きに開口する入口を造り、内部の通路は平面形で逆「L」字状となっている。石積みの高さは1m～1.2mで推移している。しかし、この構造物がどの種類の施設跡かは今回の調査で明らかにすることはできなかった。

⑧ 掘跡跡・塗壁・避難場

島の西南部海岸、内陸から2段階に発達した急崖地形が続いている。その急崖の頂部は標高約100m～140mの緩やかな山岳地形となっている。その山岳一帯から先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面にかけて掘跡跡が4ヶ所、塗壁・タコ塀が1ヶ所ずつ、蘿蔓塀が2ヶ所確認できた。

掘跡跡は当該地の中でも北側に位置し、南北方向に4ヶ所並列している。内離島にある掘跡跡と同様、地面を掘り込み、内部は円柱とドーナツ状に分かれている。直徑は約3.2m～3.8m、深さは約50cm～60cm程度である。そして、掘跡跡の内側から一直線状の掘り込みが伸びているもの内離島の掘跡跡と同様である。掘跡跡の南側にも塗壁とタコ塀が1ヶ所ずつ残存している。

山岳地形の南端部には人工塀①が残存する。人工塀①は南北方向に連なる尾根部の南端に位置し、3ヶ所の開口部から平面形で「T」字状に掘り込まれている。開口部は上部が堆積し、内部も天井が崩落している箇所も見られる。東西に貫通する通路が幅約1.2m、長さが約10m程度である。「T」字の交差する部分の天井には直垂に貫通する円形の裂穴が見られる。当該の塀は西方に向かって東方向まで一望に見渡せる箇所に

設置していることから、監視を目的とした陣地跡の可能性も考えられる。人工地②は当該地域の東側斜面に残存する。堆は開口部から地面を掘り込んだ形状を有している。傾壁は西向きから途中北西方向に折れながら約10mに亘って続き、開口部に至る。堆は砂岩に一直線状に掘り込まれ、南東方向に開口する。入口部分がやや埋没するが、残存状況は概ね良好である。幅約1.6m、高さ約1.3m、奥行は約6.5mをそれぞれ測る。内部の側壁には部材痕がはっきりと見ることができる。人工地②の周辺、つまり先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面には土留の石積みが2ヶ所、または斜面がきつい斜面を往来しやすくなるための道路跡も確認されている。

⑨ 兵舎跡、⑩ 小野隊兵舎跡

島の南部、3ヶ所の地域に戦時中、兵舎として使用された建物の基礎跡が現在も残る。⑨の兵舎跡はV字谷の西側（内陸側）斜面の中央部に2棟確認できた。2棟の兵舎跡は南北に約30mの距離に位置し、斜面が連続している当該地にわずかに残る平場ある程度造成して設置したと想定される。兵舎跡は2ヶ所ともに長方形で出入り口と思われる階段跡を見ることができる。堆木に覆われた当該の兵舎跡は時間的制約もあり、建物の規模等を計測することはできなかった。

⑩の兵舎跡は東側の山端部、急崖地形の上部に1棟確認できる。現在は堆木に覆われているが、兵舎跡の両側は急崖が迫っており、先述した人工地①と同様、西方から東方向まで一望を見渡せる位置に設置されている。兵舎跡は東西に長い長方形で、南北に約6m、東西に約12m、基礎跡の幅は約30cmである。兵舎は約1.4m四方の幅で入り口も北側に付設されている。なお⑩、堆の兵舎跡は今時の調査で初めて確認された戦争遺跡であるが、1942年（昭和17）10月に重砲兵連隊の全部隊を外離島に集結させていることから、すでに外離島へ屯駐していた小野隊が構築した兵舎かは不明である。

⑪の小野隊兵舎跡は戦時中、重砲兵連隊の第1中隊（隊長・小野原一）の兵舎として利用した建物跡である。小野隊兵舎跡は島の南西部に位置するV字谷の平野部、海岸付近に2棟残存し、建物跡や隣接するトレイ跡の規模などから下士官と上官クラスとの兵舎に分類される。

下士官で使用された兵舎は北西～南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約30m、短辺部が約6.4mである。建物の内部は長辺部、短辺部の中心に通路を十字に掘り、面積が同等の4ヶ所の部屋を有している。通路の幅は長辺部が約1.6m、短辺部が約2mで、建物の基礎枠の幅は30cmで統一されている。兵舎の周辺にはトレイ跡や井戸跡も付設している。トレイ跡は兵舎跡の北東側約10mに位置し、兵舎跡の方向と並列している。トレイ跡は通路を中心と左右対称に便器をとりそぞつ設置しているが、アダンの密生が密しく計測等を行うことができなかつた。井戸跡はトレイ跡の南東に位置する。コンクリートで構築された直径約1mの井戸と井戸を囲う方形の基礎枠が残り、基礎枠の四隅には柱跡も見られる。また、トイ跡の東側には砂岩を用いた土留の石積みが一部残存している。

下士官の兵舎跡は南北に約50mの位置に土官クラスの兵舎跡が残存する。兵舎跡は北西～南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約13m、短辺部が約6.5mである。建物の内部は面積が異なる4ヶ所の部屋を有している。兵舎跡の北西側にはトイ跡も隣接している。トイ跡はL字形で便器を1ヶ所設置し、排水物を溜め込む形も付設している。内部にはビール瓶などの遺物が散乱している。

小野隊兵舎跡が設置された当該地は、外離島にわずかに残る平場地を利用している。周辺地形は潮浮消を望める海岸とV字谷地形の急崖地に囲まれていることから、外敵に発見されにくい当該地は屯駐地として外離島で最も適した場所である。戦時中は当該地を拠点に訓練、陣地構築などの軍事活動を島の各地で行っていた。

⑫ 防空壕

島の南西部に位置するV字谷の西側（内陸側）斜面に戦時中、防空壕として利用された人工の堆が残存する。堆は砂岩が露頭した箇所に掘られ、南向きに開口する。入口部は砂岩のガマ状になっているが、自然に侵食されたかあるいは人工的に構築したかは不明である。また、入口前には戦時中使用されたと思われる金属製の網やヤカンが放置されている。入口はコンクリートで側壁、天井を階段状に枠を構築し、幅、高さともに約2mを測る。内部は入口付近の床面（コンクリート製）が一部崩落し、崩落した下部から垂直に埋め込まれた木材片が露出している。地内部は時間的な制限もあり、実測等の調査が行なうことができ

ず、位置の確認のみに留まった。内部は目測ではあるが広く、途中で北西方向にカーブしているのが見て取れる。

当該の防空壕も今回の調査で初めて確認された戦争遺跡である。「竹原町史 第十二巻 戦争体験記録」によると戦時中、西表の千立・祖納・白浜・船浦・網崎・崎山集落（現在、網崎・崎山は廢村）の住民は旧日本軍の奉仕作業として外離島に渡り、塗掘り作業などをを行なったという証言が複数記載されており、当該の防空壕が証言に相当する堆の可能性も考えられる。当該の防空壕は今後、堆内部の実測や証言者への聞き取りなど、詳細な調査が求められる重要な戦争遺跡といえる。



外離島遠景（北東から）



草避難壕遠景（南から）



草避難壕内部



草避難壕 入口前石積



外離島砲台跡遠景（西から）



外離島砲台跡 中央部砲座と外枠



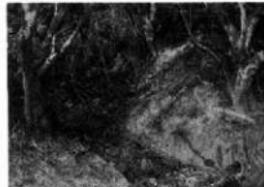
外離島砲台跡 蘭嶼穴



外離島砲台跡周辺 構造物（用途不明）



外離島南部 遺跡点在箇所遠景（南から）



蘭嶼跡



人工塹① 東側入口



人工塹① 円形豎穴（内部から）



人工塹② 入口前壁



人工塹③内部 部材痕



④兵舍跡 建物入口階段



⑤兵舍跡 建物内柱跡



小野隊兵舍跡 下士官兵舎通路



小野隊兵舍跡 下士官兵舎周辺 井戸跡



小野隊兵舍跡 上官兵舎用トイレ跡



防空壕入口



防空壕内部



防空壕内部 木材片露出状況

サバ崎（第4区）

サバ崎一帯は現在、灯台のみが設置されており、ほとんど人の出入りはない状況である。確認された戦争遺跡は①機砲跡、雷鉄機跡、②兵舎跡の3ヶ所である。記録によると戦時中、サバ崎には38式野砲が2門配置されたとのことだが、前の3管区の施設と比較しても戦略的な重要度が低い印象は否めない。しかし、機砲跡などサバ崎以外で見ることができない戦争遺跡も残存し、他の3管区の戦争遺跡とは異なる特徴を備えている。

① 機砲跡

現在のサバ崎灯台の後背部（南部）に立地する丘陵の中腹に機砲跡が2ヶ所確認できた。機砲跡一帯はスキに覆われており、判別は困難であった。2ヶ所の機砲跡は円形とドーナツ状にそれぞれ掘り込まれ、円形の板砲跡は標高の高い位置に設置されている。機砲跡の規格は直径約3m～3.4m、深さ約50cmを測る。機砲の円から一直線状の掘り込みの方向は内陸島、外洋島の機砲跡と同様共通している。



サバ崎遠景（北から）

② 機械跡

先述した機砲跡が設置されている丘陵の南側は若干であるが平地が見られる。その東側の海岸に戦時中、棧橋として利用された基礎部分の石積みが残存する。棧橋跡は高潮時にのみ確認することができる。幅は約3mで北西方向に伸びており、石積みと砂岩の切石を使用している。棧橋跡の付け根部分には海岸に埋め込まれた突起物が2ヶ所見られ、突起物は金属製と木製に分かれる。戦時中、要塞地域の各管区を往来する手段は、船橋以外の方法はなく、各管区の海岸には船橋を停泊するための棧橋を築いていた。しかし、今回の調査ではサバ崎以外に棧橋跡は確認することはできず、その意味では貴重な戦争遺跡といえる。



棧橋跡、兵舎跡遠景（東から）



棧橋跡

形状、あるいは何種設置されていたのか正確に把握することはできなかった。しかし、兵舎跡に隣接するトイレ跡はほぼ完形で残存している。トイレ跡は一辺3.8mの正方形で東側に入口の床面が見られる。内部は中心を通路が東西方向に走り、北側は大便所4ヶ所、南側は大便所2ヶ所と小便所3ヶ所が設置されている。その他兵舎跡の周囲には砂岩を粗く加工した土留の石積みや、井戸跡と思われる方形のコンクリート枠も見ることができ、位置関係まで把握することができた。



棧橋跡 金属片・木片露出状況



サバ崎兵舎跡 コンクリート散乱状況



トイレ跡（大便器）



トイレ跡（小便器）



兵舎跡南辺 井戸跡



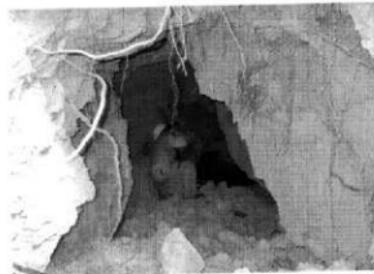
兵舎跡周辺 土留石積



聞き取り調査（西表白浜公民館にて）



調査状況（内離島 肥前跡）



調査状況（外離島 人工堆①）

第3節 与那国町

与那国町の避難壕

与那国町の避難壕は、戦争体験者による現地案内などもあって、6ヶ所確認することができた。全て自然壕を利用しており、町内に所在する3ヶ所の要路近辺に位置する。与那国町では土地改良事業による圃場整備が進んでおり、それによって、戦時中の市民避難壕として利用された自然壕が破壊されたところも聞き取りなどにより、確認されている。

1.田原川の壕

相納集落の南方には、集落前の「波多の浜」を河口とする田原川の上流部分にあたり、その近くに石灰岩の自然壕が1ヶ所、現在も残る。

沖縄戦時には相納集落住民の避難壕として利用されていた。壕は緩やかな丘陵の中腹あたりに位置し、現在は開口部脇を農道が走っている。壕は北東方向に開口する。内部は広く、下りながら奥へ進むが、現在は農作物が栽培まで堆積しているため、入口周囲までしか進入することはできない。

2.カマヌタ

相納集落の南東には、石灰岩の段丘地形が南北一北東方向に走っている。そこに自然壕が数ヶ所あり、戦時には与那国国民学校（現・与那国小学校、中学校）の生徒や先生が避難した場所となっている。現在は、囲堤の側面装備によって地表面がかさ上げされており、開口部の上部が残るのみで、内部に進入することはできない。

聞き取りによると、当該の壕は学校の避難壕として利用されただけあって、大規模な壕であったとのことで、戦時には学生がここへ避難して授業も行ったという。当時と比べると、現状は約2m程度地表面がかさ上げされているのではないかといふ。



3.ブナビダヤ

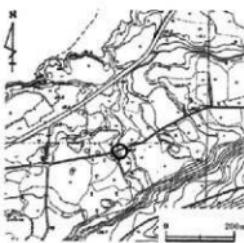
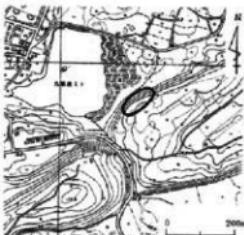
久部良集落の東方にある石灰岩の段丘に位置する自然壕。段丘の下部は町の天然記念物に指定されている湿地帯、「久部良ミト」にある。壕は北向きに2ヶ所、南向きに1ヶ所それぞれ開口し、内部で連結している。北向きの開口部前に石積みが1ヶ所見られる。内部には床面を平滑に加工した部分が確認できた。

当該の壕に案内して頼った久部良在住の長瀬一男氏によると、戦時中は、久部良の小字である満田原の分団が当該の壕に宿泊し、70人~100人程いたとのことである。また、学校の授業もここで行ったということである。また、学級にブナビダヤとは母語の方言で「夜なべの壕」という意味である。

4.クブラバルダヤ

久部良集落の北東に位置する原野には、戦時中、久部良の小字である久部良原の住民が避難した自然壕が現在も残る。

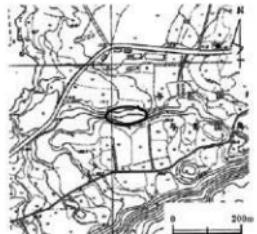
壕は小規模なドリーネ地形の下部に位置し、素振りでつくられた階段でドリーネを下りることができる。開口部は東向きで幅は約3m、奥行は約6m程度である。壕があるドリーネ内には地下水が湧き出る小規模な横谷も見られ、現在は取水パイプが取り付けられている。周辺は土地改良による畠地が広がり、旧地形を窺い知ることはできない。



5. 桃原の避難壕

久部良原の塹から北東の位置には東西方向に走る石灰岩の段丘地形が見られるが、段丘に点在する岩陰を戦時中の避難壕として利用していた。ほとんど岩陰には手を加えておらず、かつての居住地の裏手にあることから緊急避難壕の塹として利用されていたことが窺える。

当該塹に避難していた住民は、大正期につくられた桃原集落の住民である。桃原は沖縄本島で農業を営んでいた人たちが移住して形成された集落で、当該の塹の近辺に位置していた。桃原の住民は戦後、沖縄に引き揚げ、集落は消滅してしまったが、現在でも塹周辺には、当時使用していた井戸跡などが現在も残っている。



田原川の塹遠景（東から）



田原川の塹入口



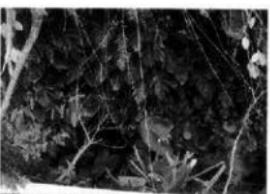
田原川の塹内部



カマヌタ塹遠景（西から）



カマヌタ入口



カマヌタ内部壁沿状況



ナビダヤ塹遠景（南西から）

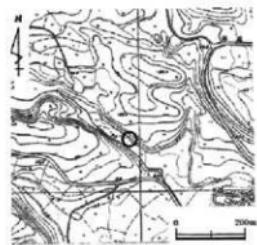


ナビダヤ入口

6. 比川の避難壕

比川集落の西方には北西—南東方向に走る緩やかな谷底地形がある。その斜面に石灰岩の自然壇があり、戦時中は比川住民の避難壕として利用されていた。

塹は開口部を3ヶ所有し、全て南西向きである。うち2ヶ所は内部で「L」の字状に連結している。塹はいずれも小規模で、高さ約1m強、奥行は最大で約3m程度である。塹口部には、幅約1m程の平坦に造成された道が見られる。平坦に造成された箇所は内部の床面にも一部、見ることができる。





ナビダヤ内部



ナビダヤ内部(床面を平坦に加工)



ナビダヤ入口前石積



ナビダヤにて聞き取り調査(中央が長瀬一男氏)



クブラルダヤ遠景(南西から)



クブラルダヤ入口



クブラルダヤ内部



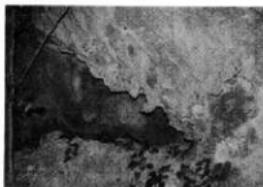
クブラルダヤ湧水穴内部



桃原の避難場遠景(北から)



桃原避難場岩陰(井戸近く)



桃原避難場岩陰



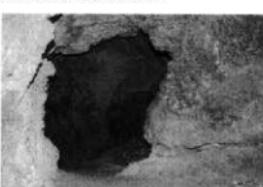
桃原の避難場周辺 井戸跡



比川の避難場遠景(南から)



比川の避難場入口



比川の避難場内部



比川の避難場入口前(平坦に加工)

7. 潮原の陸軍兵舍跡

所在地：与那国町与那国
立地（標高）：平地（約20m）
形態：構築物
種別：兵舎
現状：陸軍兵舎の基礎となる石積が残存
保存状況：細地図の原野に放置
築造者：独立歩兵第298大隊の小隊
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：陸軍兵舎として利用
主な遺構：兵舎跡の基礎となる石積み

概要

県道与那国島線（216号線）を祖納から久部良方面に進むと、比川方面に向かう交差点が見えてくる。その交差点の近辺には戦時中、独立歩兵第298大隊（通称、毛木部隊）の小隊が、駐屯地として兵舎を構築していた。現在、当時は雑木が繁茂した状態であり、残存している遺構は、兵舎跡の基礎となる野面積みの石積みが高さ0.5m～1.1m、全長約9mに亘って東西方向に走る。近くから採取でき乍ら大きな石を積み上げており、ほとんど崩れが見られず良好に残存している。建物基礎は現在、撤去されているため、建物規模や間取りといった詳細は判別ないが、聞き取りによると茅葺きの小規模で簡易な建物であったとのことである。

与那国島に派兵された軍団は、陸軍の独立歩兵第298大隊の守谷蔵隊長が率いる小隊30人で、1944年（昭和19）当該地に兵舎を構築した。また、海軍は沖縄方面撤退地隊所屬の監視哨が、与那国島の最高峰である宇良部岳頂上に1942年（昭和17）設置され、「与那国島見張所」と称した。44年に平石良一兵曹長以下15名が守備につき、電探知機を備えて沖縄方面撤退地隊と無線で情報を取り合った。宇良部岳頂上には現在、鉄塔が建てられており、その鉄塔を建築する際に監視哨は破壊されてしまったとのことである。



兵舎跡の石積基礎部分

8. 伊波南哲詩碑

所在地：与那国町与那国
立地（標高）：丘陵（標高40m）
形態：碑銘
種別：記念碑
現状：一部、路が削られている。
保存状況：良好
築造者：不明
築造年月日：1943年（昭和18）
戦時中の使用状況：国威高揚のために設置
主な遺構：顕著の石版

概要

八重山出身の詩人・作家である伊波南哲作の詩文が顕著の石版に刻まれて、ティンダハナ下の展望台監査室に嵌め込む形で掲げられている。砂岩製の石版を横長の額面に彫り上げ、その枠内に文字を刻む。文字の部分にのみ、朱が塗布されており、字体は行書体に近い。枠外の上部中央には筆を基調としたレリーフが刻まれており、その中央には四角律に文字状のデザインが見られるが詳細は解らない。ティンダハナは祖納部落の南西部に位置しており、部落内のどこからでも見ることができる。因みに1974年（昭和49）には景勝地として県指定名勝となっている。この詩碑も集落内からも望むことができるため、集落住民の国威を高揚させていく上では恰好の場所に設置していると言える。

伊波南哲は1902年（明治35）現在の石垣市登野城で生誕し、1922年（大正11）に近衛兵に選抜され、上京。その後、警視官に入庁、1941年（昭和16）に辞職して沖縄、作家生活に入る。この「瀬・與那国島」は作家生活2年目に創作されたもので、与那国島の風土、景観を謳ったものである。創作時は太平洋戦争の真っ只中であり、「南海の防衛」「皇室南洋の鎮護に奉仕」「沈没する二十五万噸の航空母艦」と軍事色の強い内容となっている。詩文の最後の行が削られている以外は判読は可能である。以下に前文を掲載する。

「瀬・與那国島」 伊波南哲

「荒洲の息吹にれて 千古の伝説をはらみ 美と力を兼ね備えた 南海の防壁與那国島 行雲流水
己の美と力を信じ 無限の情熱を秘めて 太平洋の怒濤に抗撃する 南海の防波堤與那国島 宇良部岳の
雲霧 田原川の尽せぬ流れ 離しき人情の花を咲かせて 蔚然とそそり立つ與那国島よ お汝は
黒々として 皇室南海の鎮護に挺身する 沈没する二十五万噸の航空母艦だ」

紀元二千六百三十三年三月

第5章 結語

平成16年～17年度にかけて実施した八重山諸島地区的戦争道路詳細分布調査において所在を確認した戦争道路は、111ヶ所であった。これら戦争道路は人工構造、自然構造が主として確認され、他に建造物、砲台跡、記念碑等も確認された。各市町ごとの内訳は以下の通りである。

石垣町 69ヶ所 竹富町 34ヶ所 与那国町 8ヶ所

沖縄県内でも八重山諸島は1922年（大正11）、西表島船浮において要塞建設が予定されていたことから日露戦争直後から東中国海における戦略的配置付けは高かったものと見られている。1941年（昭和16）の船浮要塞建設に始まり、1944年（昭和19）石垣島は旧日本陸軍が本格的に駐屯するようになると、石垣島各所に陣地塹やトーチカ、銃撃場等が配置されるようになる。同時に空襲が激しくなると八重山諸島住民は同時に避難場を集落内外に構築し、若しくは自然洞穴を避難場に利用するようになる。このよう八重山諸島は大正期から戦略的に重視され、太平洋戦争開始から終戦直前まで旧日本軍が構築し、住民も日常生活に支障をきたしていたという。それぞれの状況を明示させる戦争道路が当該地域において確認することができた。以下に、各地域ごとに触れていくこととする。

1) 石垣島

まず石垣島においては地域の研究者による実地調査の成果が既に挙がっており、それを追認していく形で調査を進めた。未だ国化されていない1940年の概要や建築跡のプランを把握していくことに努めたが、当初の予想以上に戦争道路の数が多く、時間的制約もあり、全てを把握することができなかつた。とりわけ広範囲に施設を配置する戦争道路に関してはより広域の調査を行う必要性があるようと思われた。そのいくつかを以下に掲げる。

於茂登岳水系の戦争道路群は広範囲でかつ残存状況も良好な遺構も多く見られた。今回の調査では特に遺構が密集している区域の隣間に男したが、谷沿いに塹を構築している状況を見ると隣接する谷筋にも施設が配置されていた可能性は高い。また、白木の戦争道路群でも広範囲に地下塹、塹壕、タコ塹、カマド跡、歩道が配置されていることが確認され、中でも大川住民避難地においてはかなりの密度で塹壕、タコ塹が設けられていることが今回の調査で新たに判明した。跡跡範囲を広げれば、遺構が確実なものと思われる。広範囲に遺構が残存する戦争道路で、上記の於茂登岳東麓の戦争道路群、白木の戦争道路群以外ではパンナ法の戦争道路群を覗むことができる。パンナ岳頂上の塹、壁の張出しやタコ塹、コンクリート造りの塹といふ多種多様な遺構を確認することができた。周囲は公園になっているため、一部を除いて良好に残存しており、今後において遺構が確認される可能性が高い戦争道路と言える。

塹壕群ではフルスト原の海軍塹壕群、川平溝の特攻艇塹壕群、宮良の特攻艇塹壕群がある。何れも一直線上に掘り込んだ塹で、崖下にはば同方向で塹口を開いている。後二者は海岸に近くに構築された特攻艇塹壕群で、現在も木麻呂や石積みが塹内に残されている。川平溝並びに宮良用近くの飛行場線に配置されていることから石垣島においては消地形が特攻艇塹壕群の立地条件として最適であったことが窺われる。フルスト原の海軍塹壕群はかつての海軍飛行場（現・石垣空港）と接続しているため、飛行場と連動した形で使用されていたと考えられ、川平溝の特攻艇塹壕群、宮良の特攻艇塹壕群とは性格を異にしていると言える。

今回の調査に際しては住民避難場（以下、避難場）が多く残されていたことを改めて確認された。避難場は陣地塹と比較しても小規模で、加工度が低いためにあまり認識されにくく、戦後の開拓で埋没しないで破壊された避難場は数多くある。石垣氏宅の避難場といった民家の敷地内に構築された塹や、集落から距離を置いた場所にある自然洞穴を避難場として利用した宮良牧中の避難場を始めとして、石垣島

各地に多様な形で残存している。これらの塹は八重山地域の戦争を語る上で欠かすことのできない戦争道路であることは言うまでもなく、今後において平和啓発等で活用していく格好の材料となっていくものと思われる。余談ではあるが、これら避難場に関する各地域の研究者および有識者から多大な情報を聞いたことに同時にこれまでの地道な調査成果の積み重ねがあったからこそ、場所の特定や現状を把握すること等、調査が円滑に実施することができたと言える。地域の文化財は地域住民によって認識されていることを調査を通して感じることができた。

2) 竹富町

羅島から成る竹富町の島々では西表島を除いて避難場が最も多く確認された。石垣島の避難場と同様に自然洞穴を利用したものであり、主に聞き取り調査によって数多くの避難場が確認された。海岸線や海岸から少し内陸に入った場所にある自然洞穴を利用して居た避難場が一般的に見られ、何れも築造近くに立地している。中には新城島（上地島）のニスカラガマのように波の浸食を受けてノッチ状となった石垣岩を一時的な避難所として利用すると言った場所や他の最高地点が17.2mという島嶼では異常に堅い避難場といった、各島の地域性に適した避難場が設定されていたことを窺うことができた。数は少ないものの旧日本軍が構築した塹も確認され、それらは竹富島南海岸の駒頭跡・小浜島のアルムティ特攻艇塹壕といった。石垣島から近い島嶼に見ることができ、石垣港を中心として旧日本軍の施設が配置されていたことを読み取ることができる。

そして西表島の西側には船浮要塞跡がかなり良好な状態で残っているのが確認できたのは今回の調査では大きな成果であった。かつて船浮要塞は糸崎島、外羅島、内羅島、サハ島の4管区に分かれており、各区内において要塞に係る施設が残されていた。具体的には兵舎跡や付属のトイレ跡、砲台跡、避難場、洞窟跡、捷跡跡、梯段跡といった連の施設跡を把握することができた。戦時では熟人であつたことからそのままで60年間、放置された状態で残されていたと言え、国内でもこれほど残存状況が良好な要塞跡は極めて少ないと言える。また、船浮集落南側にある戦争道路群でも残塹跡の残る砂礫堆を中心として多くの塹壕が残存している。また、船浮集落改修等が全く行われておらず、船浮要塞跡群に隣接する戦時はそのまま放置された状態で残されている。これらの戦争道路から石垣島から竹富島、小浜島にかけての一帯と船浮湾一带が旧日本軍の戦略的重要地点として認識されていたことを容易に理解することができる。同時に各施設の配置状況からかなり実戦的な戦闘を想定しており、あくまで軍主体の政策が当該地域において遂行されていたことを窺い知ることができる。

3) 与那国町

与那国町は与那国島1島から成る。戦時に島は旧日本海軍沖縄方面根拠地隊所属の監視哨が1942年（昭和17）宇摩部岳山頂に設置されていた。1945年（昭和20）に空襲を受け、戦後の調査時に破壊されてその痕跡は現在、見ることができない。一方で1944年（昭和19）に独立歩兵第298大隊の小隊守谷部隊が祖納西側に配置された。その歩兵路が潮原に残り、与那国町で唯一の旧日本軍隊の戦争道路として現在も見ることができる。

大規模な軍備は与那国島内には配置されなかったが久瀬良・祖納集落で空襲があったため、住民は避難場を利用している。今回の調査でそのほとんどが築造から徒歩で20分程度の距離にあり、自然洞穴を利用したものが大半であることが判明した。中にはカマヌの避難場のように昔から祖納集落住民の休憩場所として親しまれていた自然洞穴を避難所として利用していることから、身近な場所にある洞穴を空襲時に一時的な避難所として使い、新たに塹を掘り込んで構築するといったことはなかったものと思われる。石垣島や西表島船浮のように、本格的に軍が駐屯していないために構築場の指示が住民に行き渡っていないかったのか、自然洞穴利用の形で事実通りでいたのか、何れの理由が考えられる。軍民間における有事の際の対応が与那国町ではどのようなものであったのか、更に考えていく必要があることをこのような戦争道路の有り方から提起させられた。

4) 今後の課題

今回の調査では当初確認されていた戦争道路の確認に加えて新たに確認された戦争道路が多数あった。道場で見ると建物跡を最も多く確認することができたのは大きな成果であったと最後に掲げておく。船浮要塞で確認された戦争跡は最も多いが、他に那国町の瀬原の陸軍兵舎跡や石垣市の平久保崎の海軍特設見張所跡、名蔵のトーチカに見られるような地上に構築した戦争跡が予想以上に残存していた。戦争道路においては道下塗やタコ巣といいった地下に掘り込んだ道構造が良く残存し、地上的構築物は戦後のスクラップ回収等で陸軍基礎まで破壊されてしまうケースがほとんどである。建物跡から当時の兵舎の規模や部屋割り、更に配属された人員の数等、新たな沖縄戦のあり方を提示できる資料になってくるものと思われる。当然ながらこれらに関する聞き取り調査は早急に行っていく必要があり、実際の道構の状況とをあわせて検討していかなければならぬ。

地域で見ると竹富町、与那国町において遺留堆を始めとする戦争道路が新たに確認された。石垣島以外の離島における戦争道路の実態がかなり明確になったものと思われる。このことは從来まで竹富町、与那国町内の戦争道路が不明瞭であったことの裏返しで、戦争体験者が語ることがなければ、その存在が知られることなく歴史の間に置き去りにされていく道跡であったともいえる。去る大戦が終わって60余年が経過しているが未だ戦時体験者は存命である。しかし、戦時体験者の多くが高齢となり、聞き取り対象者もかなり限られてきている。

今回の沖縄県戦争道路詳細分布調査事業がこの報告書の刊行をもって終了となり、ひとつ区切りとして位置付けることができるが、決して戦争道路の調査がこれで完結したわけではない。一人でも多くの戦時体験者から言質を取り、未だ確認されずにある戦争道路の確認を今後も地道に続けていく必要性は当然ながらある。当時の沖縄県における戦争の新たな侧面を掲載していく原材料として戦争道路を位置付け、更にその意味を問い合わせていくべきである。

(参考文献)

- 斎名波宋「宮古島戦記」先島戦記刊行会 1966
斎名波宋「石垣島防衛戦史」先島戦記刊行会 1970
沖縄県教育委員会「沖縄県史10 沖縄戦記録2」図書刊行会 1974
石垣市史編集室「市民の戦時・体験記録 第一集」石垣市役所 1983
沖縄大百科事典刊行事務局「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社 1983
石垣市史編集室「市民の戦時・体験記録 第二集」石垣市役所 1984
石垣市史編集室「市民の戦時・体験記録 第三集」石垣市役所 1985
本崎甲子郎「那国島の地質誌」沖縄タイムス社 1985
石垣市史編集室「市民の戦時・体験記録 第四集」石垣市役所 1988
大田静男「八重山の戦争」南山閣 1996
竹富町史編集委員会「竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録」竹富町役場 1996
石垣市総務部市史編集室「平和祈念ガイドブック ひびけ平和の鐘」石垣市 1996
斎名波宋「太平洋戦争記録 石垣島方面勝利軍作戦」沖縄県史刊行会 1996
八重山戦争マラリア犠牲者追悼祈念編集委員会「悲しみをのり越えて—八重山戦争マラリア犠牲者追悼平和祈念誌」沖縄県生活福祉部援護課 1997
大城将裕「第2次世界大戦配給と全島要塞化」『沖縄戦研究II』沖縄県教育委員会 1999
竹富町史編集室「竹富町史資料集① 鈴田義司日記—船浮要塞重砲連隊の軌跡—」竹富町役場 2000
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争道路詳細分布調査(Ⅰ) —南部編—」沖縄県立埋蔵文化財センター 2001
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争道路詳細分布調査(Ⅱ) —中部編—」沖縄県立埋蔵文化財センター 2002
高良倉吉「沖縄県の地名」平凡社 2002
与那国町史編集委員会事務局「交響する島宇宙 日本最西端 与那国島の地名と風土」「与那国町史 第1巻」与那国町役場 2002
菊池実・十豪教武「じらべる戦争道路の事典」柏原房 2002
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争道路詳細分布調査(Ⅲ) —北部編—」沖縄県立埋蔵文化財センター 2003
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書」沖縄県教育委員会 2004
沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争道路詳細分布調査(Ⅴ) —宮古諸島編—」沖縄県立埋蔵文化財センター 2005



沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)

—八重山諸島編—

2006年（平成18）3月27日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098(835)8751-8752
<http://www.mazou-okinawa.gr.jp/>

印刷 丸正印刷株式会社
〒903-0211 沖縄県西原町小那納1215番地
TEL 098(835)8181（代）

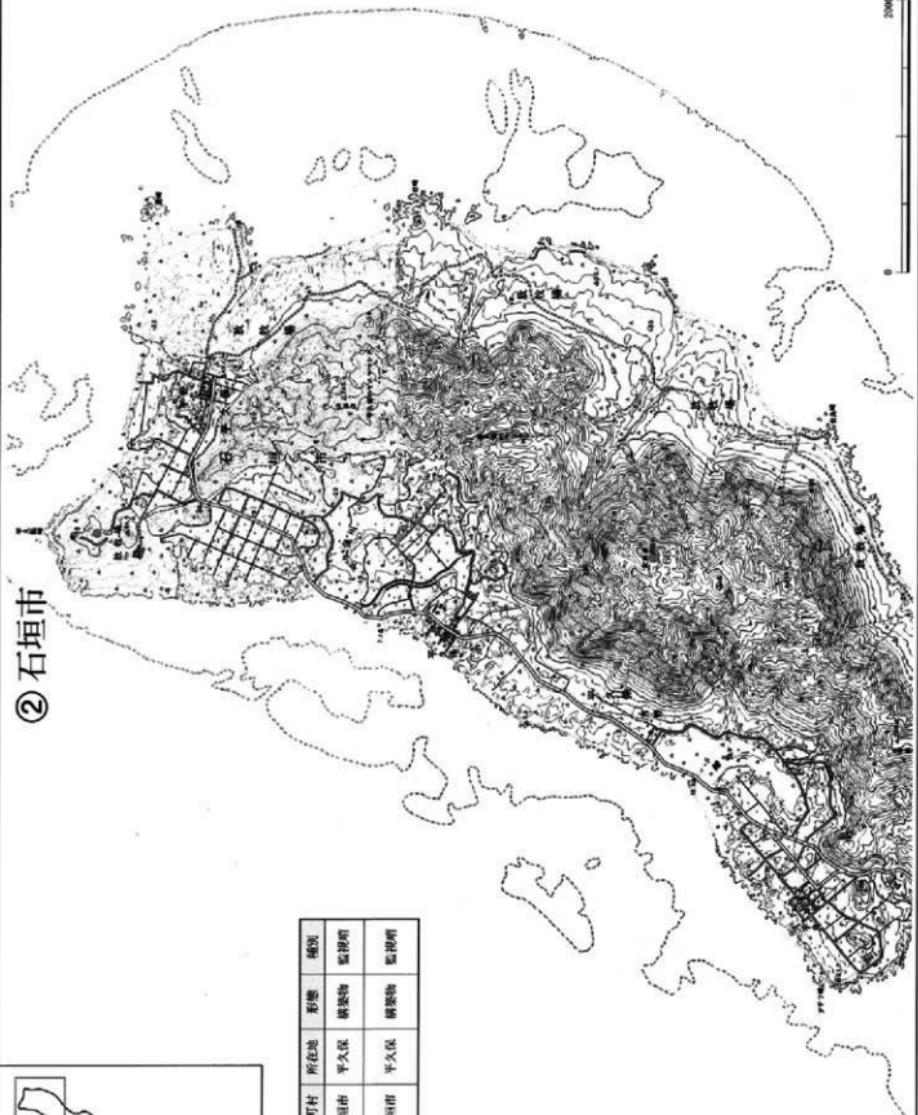
© 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。



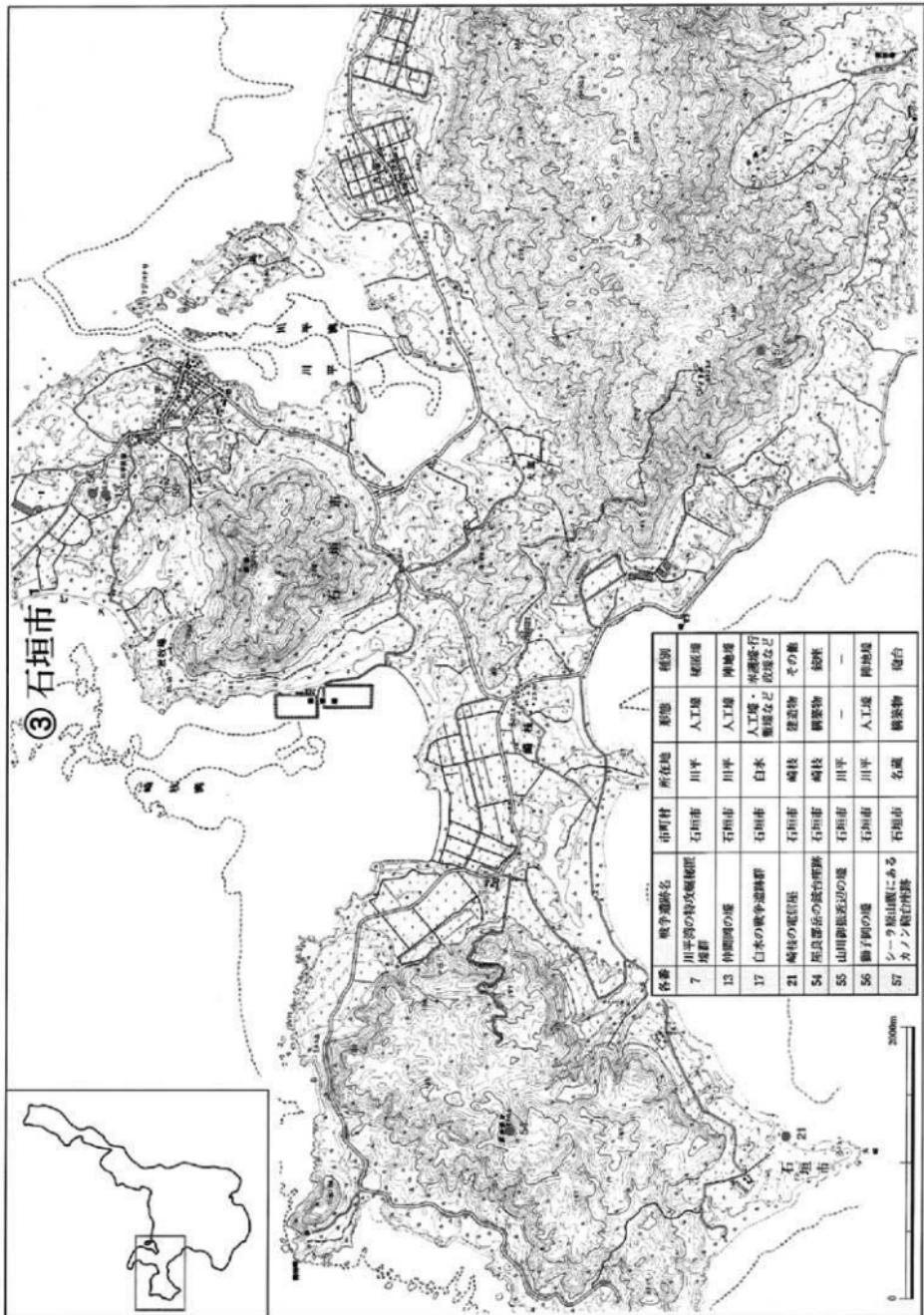
② 石垣市



名番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
6	平久保崎の海軍特設 風向所跡	石垣市	平久保	構築物	監視所
66	安良島の海軍特設見 張所跡(石垣特設見 張所)	石垣市	平久保	構築物	監視所

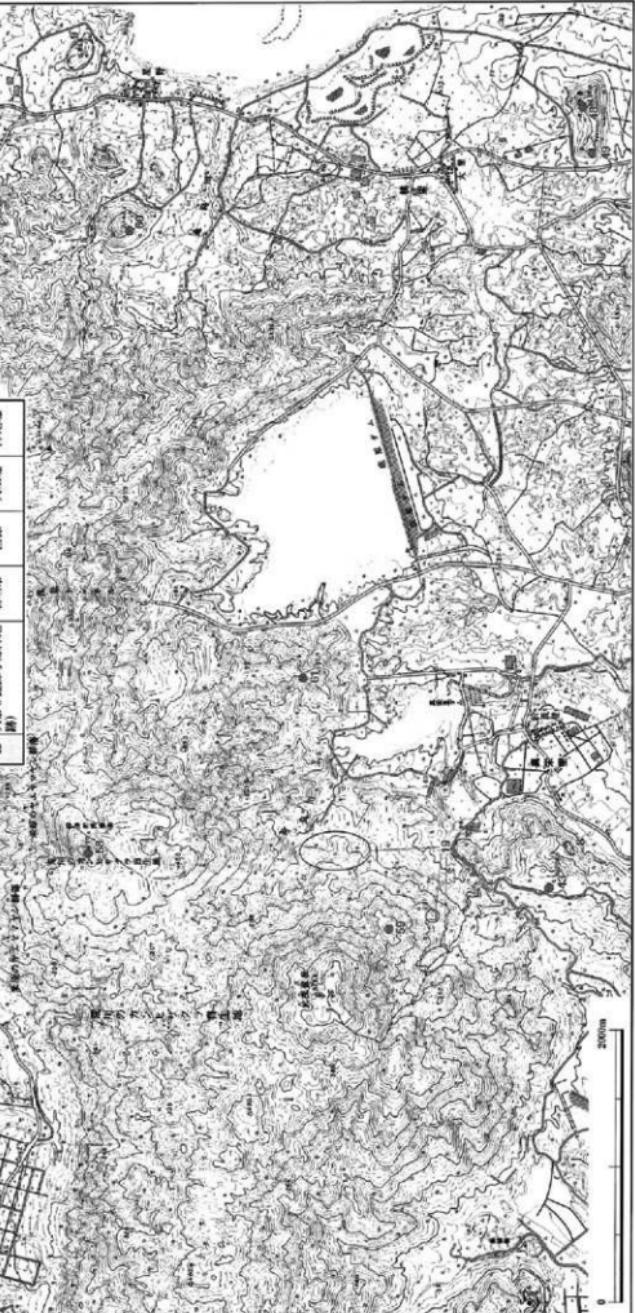


③ 石垣市



④ 石垣市

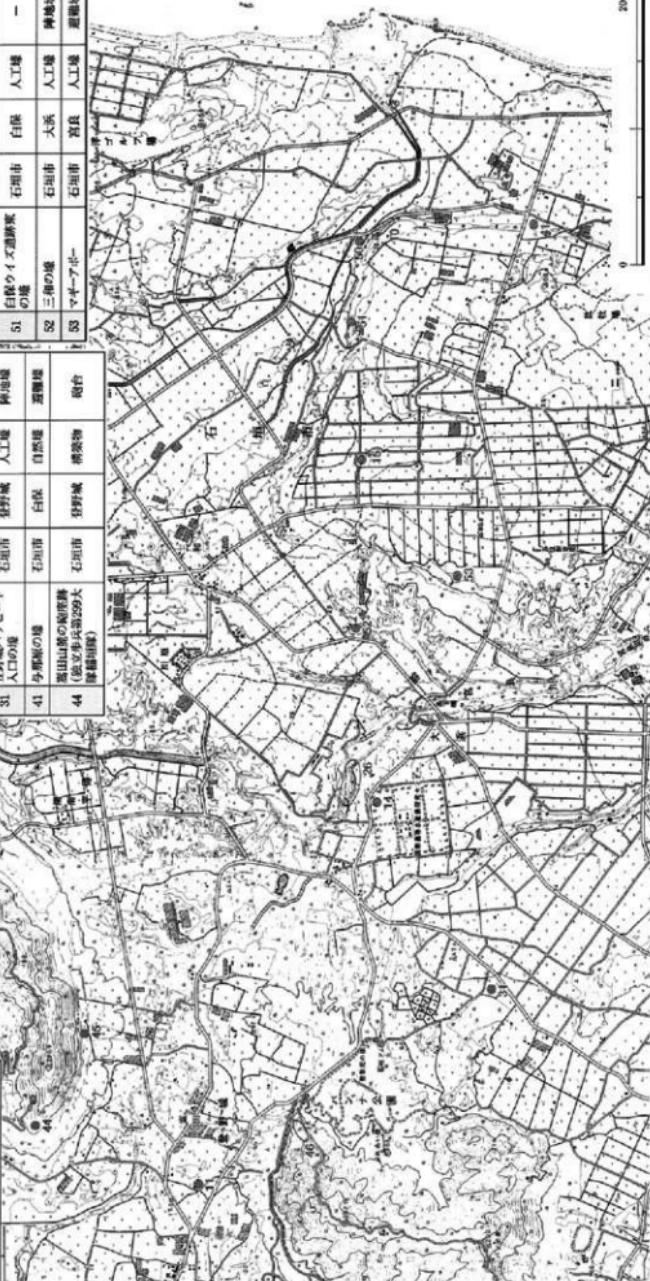
番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
8	片瀬山の鳥羽船 陸軍陣地と外堀平塹	石垣市	園田	構築物 弾薬庫	人工地
9	伊那川手島の砲	石垣市	東里	人工地	人工地
10	片瀬山の戦争遺跡	石垣市	片瀬	人工地 弾薬庫	人工地
11	片瀬山かまど跡	石垣市	真栄里	構築物	人工地
12	片瀬山の砲	石垣市	白保	人工地	人工地
49	カウ品山の砲	石垣市	白保	人工地	人工地
50	兵第8連隊小隊陣地	石垣市	片瀬	構築物	人工地
58	片瀬山の砲	石垣市	片瀬	人工地 弾薬庫	人工地
59	八重山神社	石垣市	片瀬	祭壇	精神的
60	馬鹿のいし	石垣市	片瀬	人工地	人工地
61	武城原の山頂	石垣市	片瀬	構築物	人工地



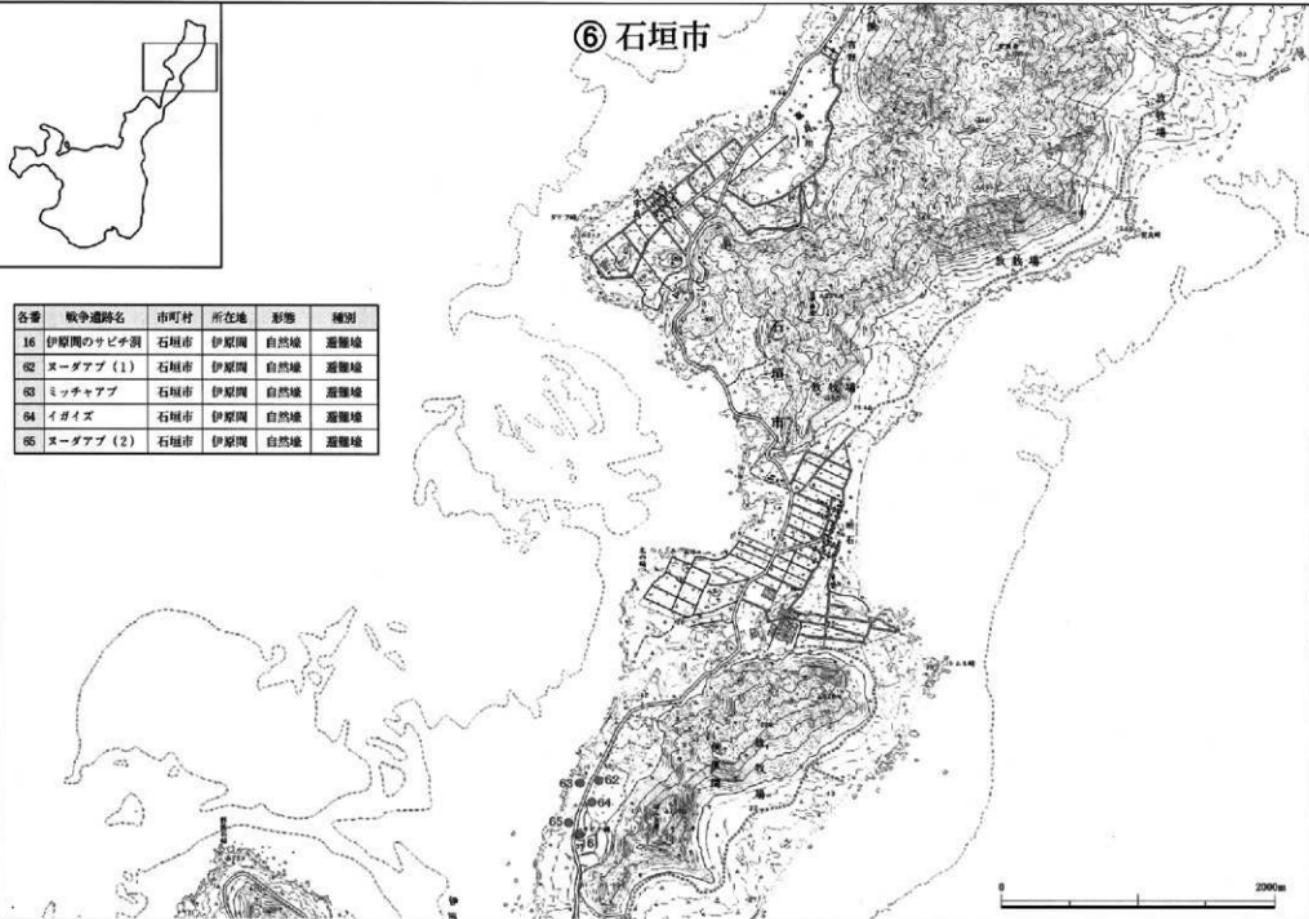
⑤ 石垣市

番号	現令地名	所立地	形地	構造	面積
10	自立保育園の場	椿野村	白保	人工地 構造物	耕種地
11	名城公園の場	石垣市	名城	トーチカ	45 高校新宿駅人口 の場
14	平井名谷川場跡の場	石垣市	平井	人工地 構造物	46 電気新開発地 の場
15	官良牧の施設地	石垣市	官良牧	自然地 構造物	47 バスカラタバノ タコ巣
26	ヘーネー地・三	石垣市	大浜	人工地 構造物	48 白保村に施設 の場 (現段に移カ ル)
31	野球場・ラビード	石垣市	野球場	人工地 構造物	49 白保村・ズ通新駅 の場
41	与那原の場	石垣市	白保	自然地 構造物	50 三和の場
44	高山寺の施設跡 (佐立市兵高59大 陸橋跡)	石垣市	野球場	構造物	51 マザーアボー

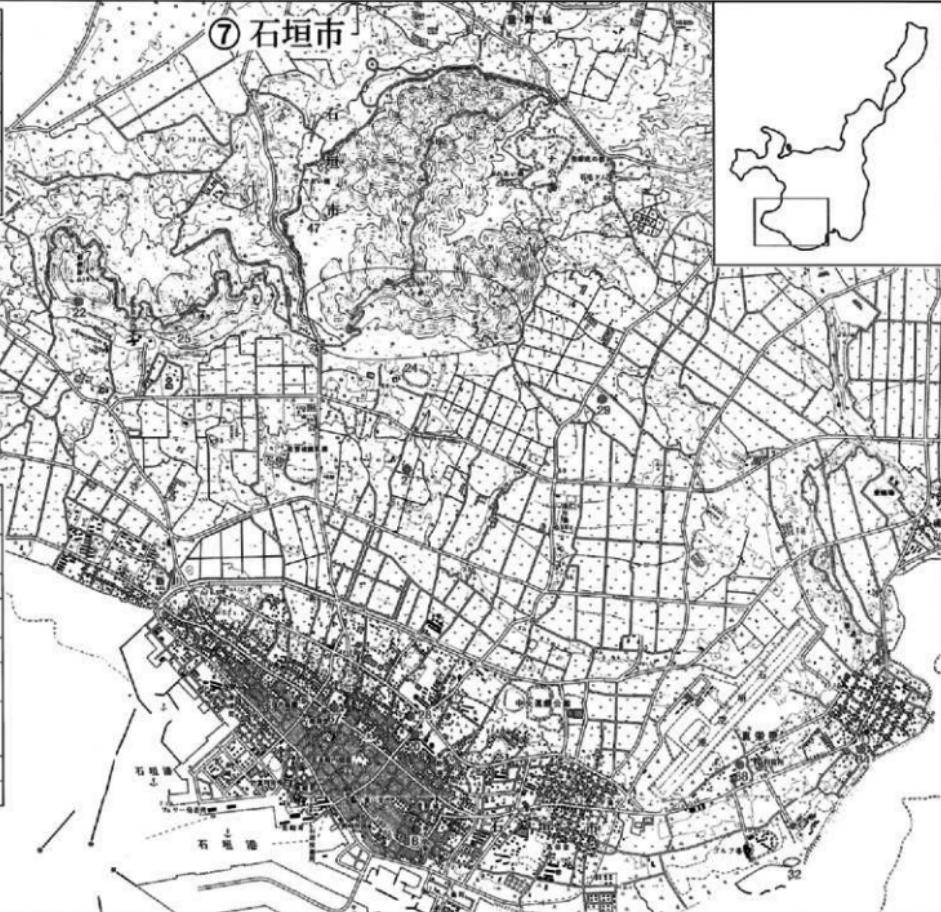
番号	現令地名	所立地	形地	構造	面積
45	高田原(ひがし山根林 の場)	石垣市	高野原	人工地 構造物	—
46	東入日地、朝見、 白保村に施設の 場	石垣市	野球場	人工地 構造物	耕種地
50	白保村に施設の 場 (現段に移カ ル)	石垣市	白保	自然地 構造物	耕種地
51	白保村・ズ通新駅 の場	石垣市	白保	人工地 構造物	—
52	三和の場	石垣市	大浜	人工地 構造物	耕種地
53	マザーアボー	石垣市	官良	人工地 構造物	耕種地



⑥ 石垣市



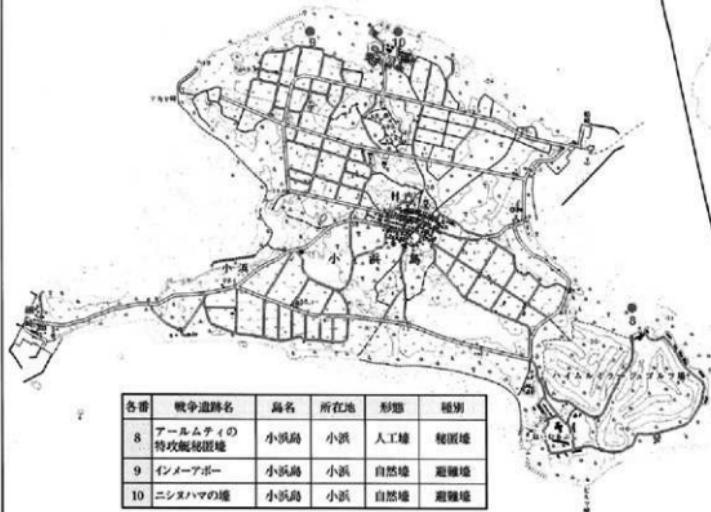
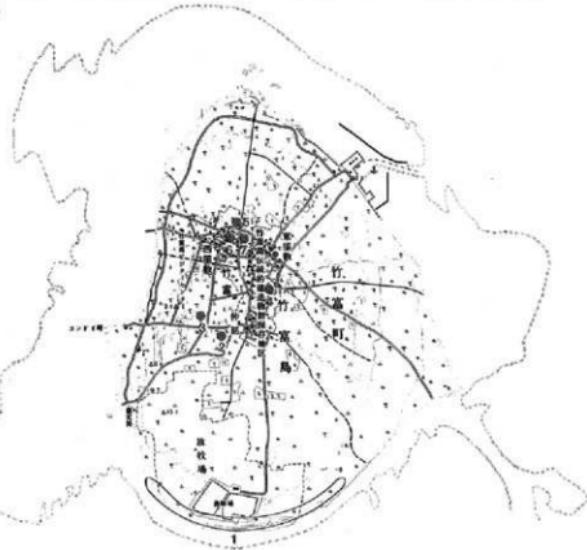
名番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
18	石垣島地方気象台の郭跡	石垣市	登野城	建造物	その他
20	登野城小学校の奉安殿	石垣市	登野城	建造物	記念碑
22	前勢岳南麓の砲台跡	石垣市	新川	構築物	砲台
24	パンナ岳の戦争遺跡群	石垣市	大川、石垣	人工堆・整地など	陣地跡
25	前勢岳の塹・炮塹	石垣市	新川	塹・炮塹	陣地跡



① 竹富町



名番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
19	アンスカ	鳩間島	鳩間	自然壠	避難塁
20	パチンガカ	鳩間島	鳩間	自然壠	避難塁



名番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
8	アールムティの特攻艇配匿場	小浜島	小浜	人工壠	掩蔽塁
9	インメアーポー	小浜島	小浜	自然壠	避難塁
10	ニシヌハマの塹	小浜島	小浜	自然壠	避難塁

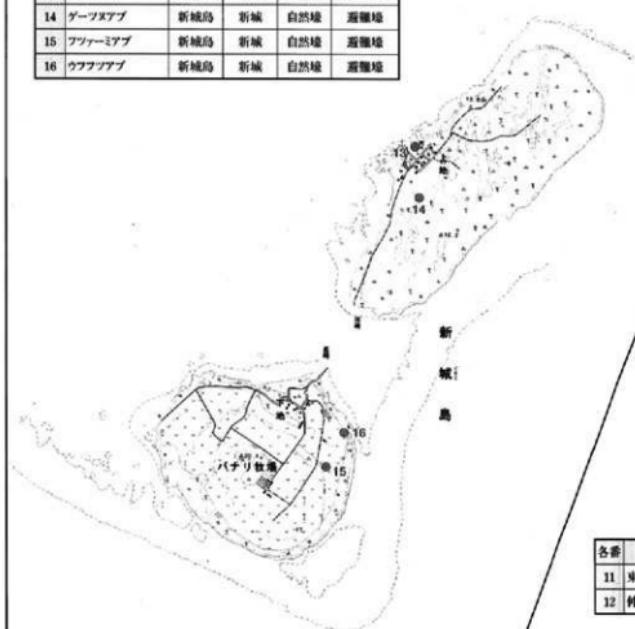
名番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
1	竹富島南海岸の跳躍點	竹富島	竹富	人工壠	機関銃塹
2	ヤンガー	竹富島	竹富	自然壠	自然壠
3	テラクガマ	竹富島	竹富	自然壠	自然壠
4	トゥーリングックの地下壕	竹富島	竹富	人工壠	陣地壠
5	竹富村忠魂碑	竹富島	竹富	碑銘	記念碑
6	国吉家の御祖跡	竹富島	竹富	建造物	その他
7	河上家の御祖跡	竹富島	竹富	建造物	その他

0

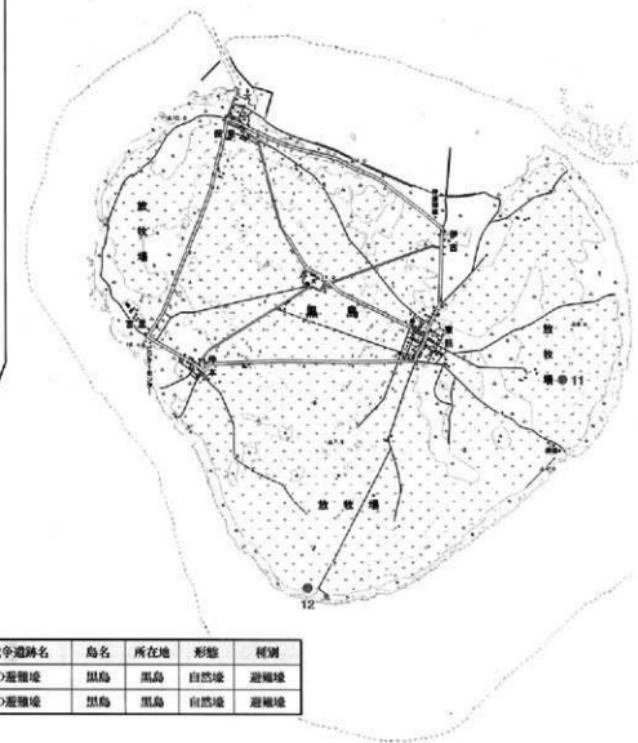
2000m

② 竹富町

番号	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
13	ニスヌガマ	新城島	新城	自然塙	避難塙
14	ゲーツヌアブ	新城島	新城	自然塙	避難塙
15	フツアーミアブ	新城島	新城	自然塙	避難塙
16	ウツヌアブ	新城島	新城	自然塙	避難塙



番号	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
11	東島の避難塙	黒島	黒島	自然塙	避難塙
12	仲本の避難塙	黒島	黒島	自然塙	避難塙



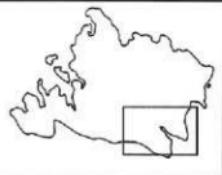
③ 竹富町

名番	戦争道路名	島名	所在地	形態	種別
17	北東端の避難堤	波照間島	波照間	自然堤	避難堤
18	キッノリヤマの堤	波照間島	波照間	自然堤	避難堤

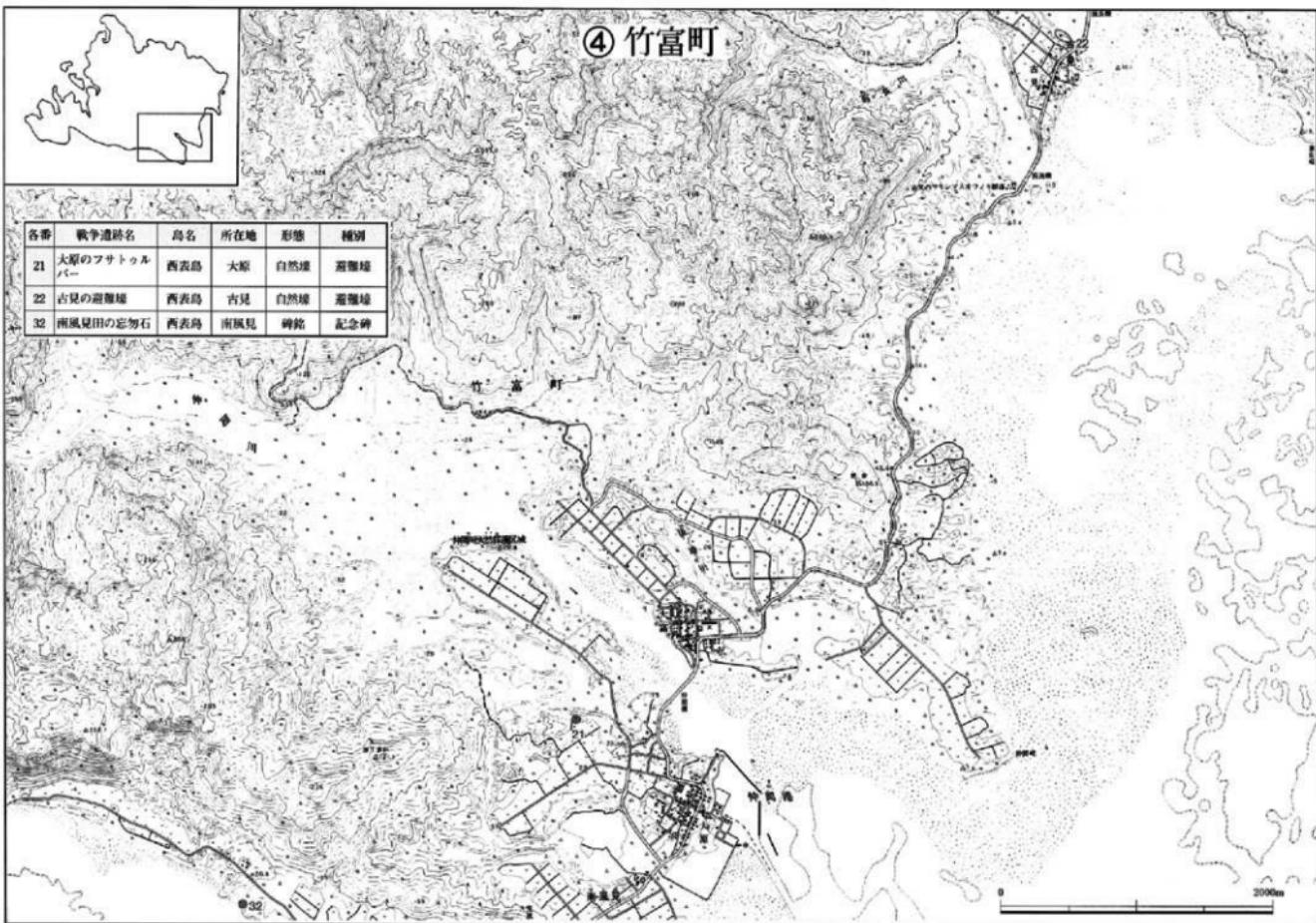


0 200m

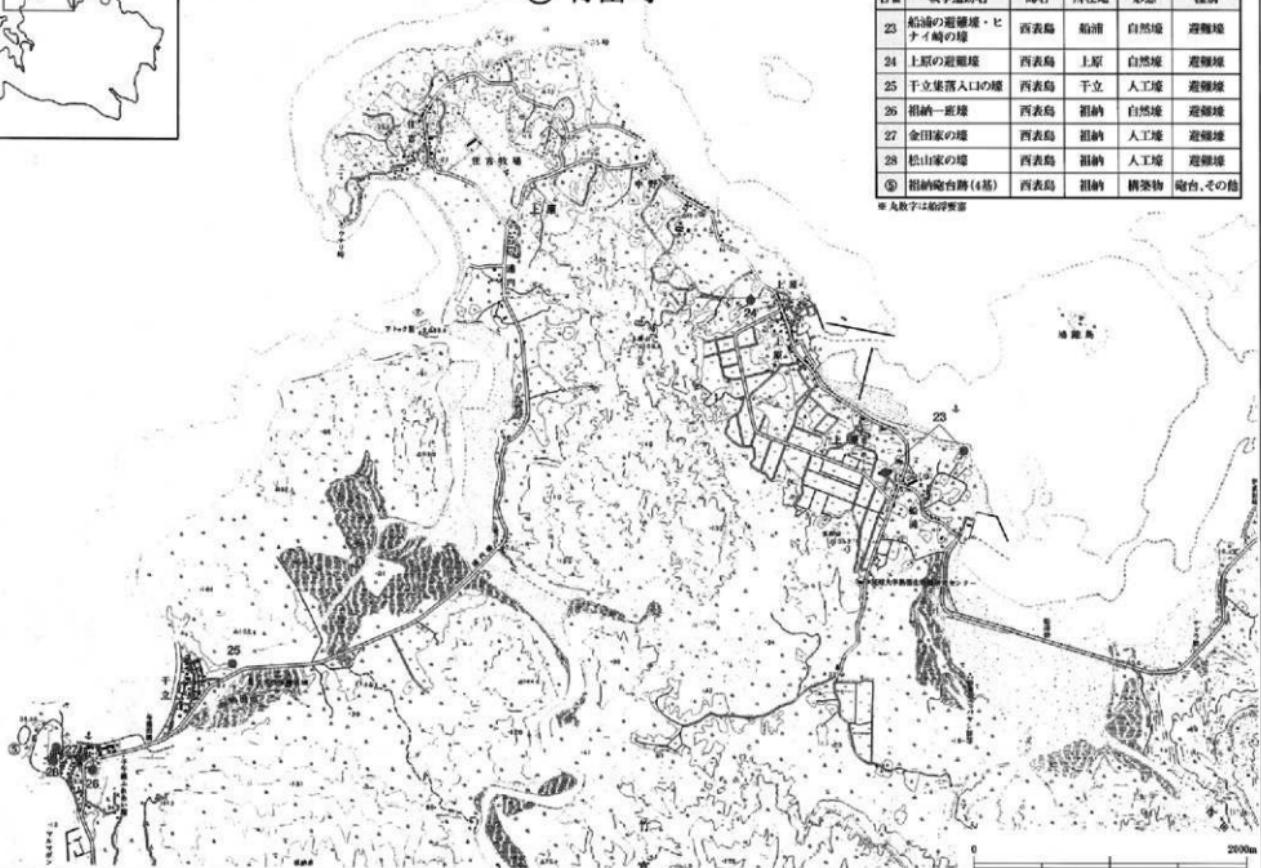
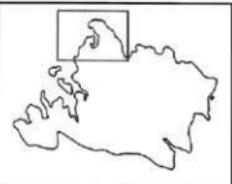
④ 竹富町



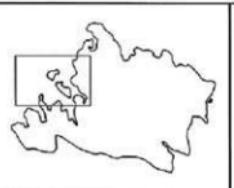
番号	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
21	大原のサトックルバー	西表島	大原	自然壠	避難場
22	古見の避難場	西表島	古見	自然壠	避難場
32	南風見田の忘勿石	西表島	南風見	碑銘	記念碑



⑤ 竹富町

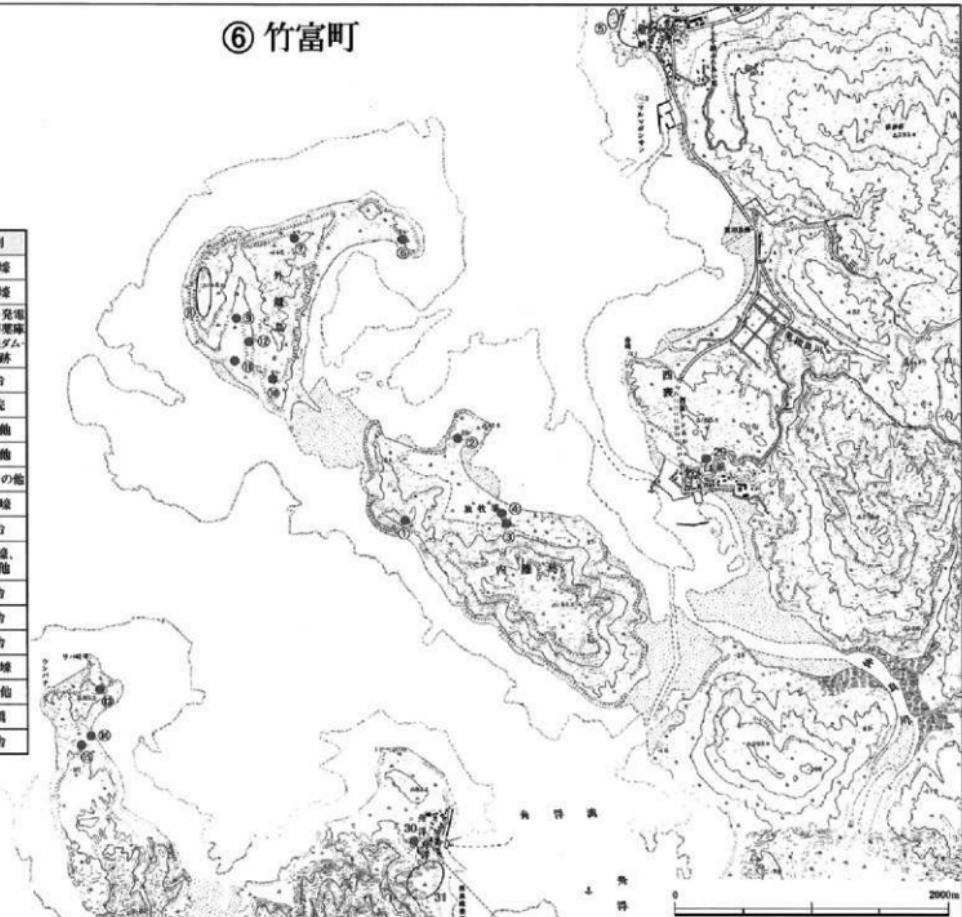


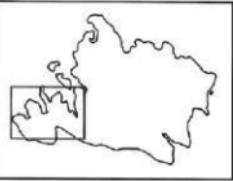
⑥ 竹富町



番号	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
29	白浜の避難場	西表島	白浜	人工場	避難場
30	船浮の避難場	西表島	船浮	人工場	避難場
31	船浮の戦争遺跡群	西表島	船浮	人工場・構築物・機械物	船浮・発電機場・停電障害・水道ダム・栈橋跡
①	内離島砲台跡	西表島	内離島	構築物	砲台
②	陸軍病院跡	西表島	内離島	構築物	病院
③	船浮要塞司令部跡	西表島	内離島	構築物	その他
④	成屋の悲安所跡	西表島	内離島	構築物	その他
⑤	祖納砲台跡(4基)	西表島	祖納	構築物	砲台・その他
⑥	軍避難場	西表島	外離島	自然場	避難場
⑦	外離島砲台跡	西表島	外離島	構築物	砲台
⑧	駆逐跡、塹壕、避難場	西表島	外離島	人工場・塹壕等	避難場・その他
⑨	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑩	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑪	小野隊兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑫	防空壕	西表島	外離島	人工場	避難場
⑬	サバ崎の駆逐跡	西表島	サバ崎	構築物	その他
⑭	栈橋跡	西表島	サバ崎	構築物	栈橋
⑮	サバ崎の兵舎跡	西表島	サバ崎	構築物	兵舎

* 大数字は船浮要害

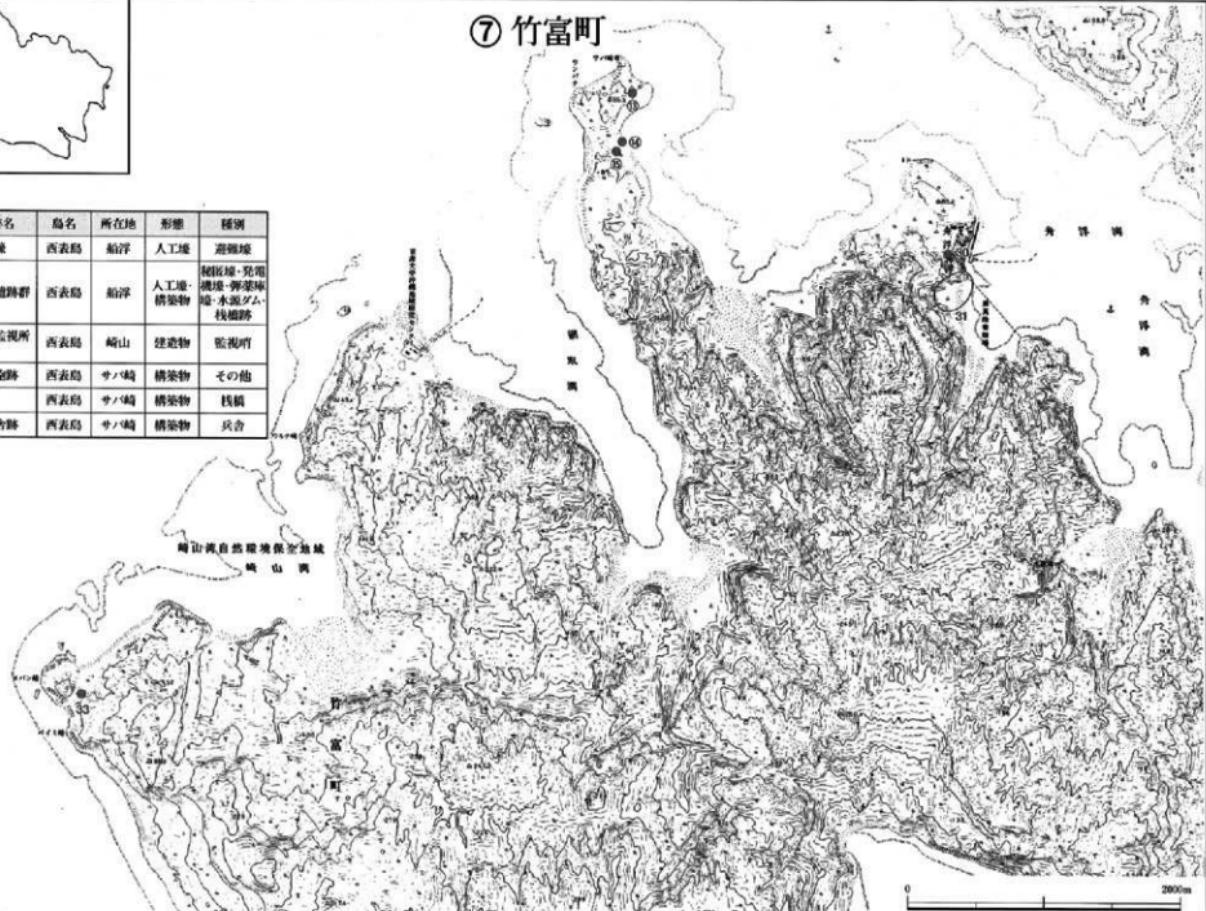




⑦ 竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
30	船浮の避難場	西表島	船浮	人工堆	避難場
31	船浮の戦争道路群	西表島	船浮	人工堆・構築物	戦争道路・作業場
33	パイミ崎の監視所跡	西表島	崎山	建造物	監視所
⑩	サバ崎の報砲跡	西表島	サバ崎	構築物	その他
⑪	桟橋跡	西表島	サバ崎	構築物	桟橋
⑫	サバ崎の兵舎跡	西表島	サバ崎	構築物	兵舎

* 九数字は海岸距離



① 与那国町

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
1	田原川の塹	与那国町	祖納	自然塹	遺跡塹
2	カマヌタ	与那国町	祖納	自然塹	遺跡塹
3	ブナビダヤ	与那国町	久都良	自然塹	遺跡塹
4	クプラバルドガ	与那国町	久都良	自然塹	遺跡塹
5	桃原の遺跡塹	与那国町	久都良	自然塹	遺跡塹
6	比川の遺跡塹	与那国町	比川	自然塹	遺跡塹
7	津原の陸軍兵舎跡	与那国町	祖納	構築物	兵舎
8	伊波南哲翁碑	与那国町	祖納	碑銘	記念碑

